

千葉県八千代市

栗谷遺跡

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

— 第2分冊 —



2003

大成建設株式会社

八千代市遺跡調査会

序 文

八千代市は下総台地の北西部に位置し、東京への通勤圏内として昭和32年の八千代台団地の入居以来、首都圏の住宅都市として発展してまいりました。特に、昭和40年代半ばからは次々と団地の建設が行われ、それに伴う人口の増加は目ざましいものがあり、八千代市の姿は近郊農業地帯から住宅都市へとその趣を変えております。しかし八千代市はかつての印旛沼と新川等の豊かな水を背景とした多くの自然も残され、新川を中心とする水辺は市民の憩いの場ともなっており、今後も、自然と調和した住宅都市として発展していくことと思われまます。

一方、この住宅都市としての発展に伴う宅地造成等によって失われる遺跡を保護するために、発掘調査等を行いその保護に努めてまいりました。そしてこの緑豊かな大地には、およそ三万年前の昔である旧石器時代から多くの人々が暮らしを営んできていたことが、近年の調査によって分かっています。また、新川流域の奈良・平安時代のムラの跡からは、数多くの墨書土器が出土し、八千代市は全国でも墨書土器の出土では有数の地となっております。

このようななかで、昭和40年代に八千代市域の北東部の保品、神野、米本にわたる地区に「(仮称)八千代カルチャータウン」の開発が計画されました。この開発予定区域内には多くの遺跡の所在が知られており、ここに所在する埋蔵文化財の保護について関係諸機関による慎重な協議が重ねられてまいりました。その結果、遺跡の一部を現状保存し、保存のできない地区についてはやむをえず発掘調査を行い記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は八千代市遺跡調査会の手により昭和63年3月から開始され、平成11年3月に終了致しましたが、この期間に調査を行った遺跡は9遺跡34地点に及び、旧石器時代から近世に至る貴重な調査成果をえることができました。そして平成12年4月より順次、整理作業を進めておるところです。

本報告書はこの9遺跡のうち、栗谷遺跡の調査の成果の一部をまとめたものです。栗谷遺跡では縄文時代や弥生時代、奈良・平安時代のムラの跡が検出されており、それに伴う遺物も数多く出土しております。その成果をいくつかの地区に分け3分冊によって報告することになっており、今回ここに報告いたしますⅡ地区では八千代市では数少ない弥生時代中期のムラの跡等も調査されております。そして本書が学術資料としてはもとより、広く教育機関や地域の歴史に関心をもたれる方々、また、文化財の保護のために広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまでの長期間にわたってご協力いただきました大成建設株式会社をはじめといたしまして、ご指導・ご助言をいただいた千葉県教育委員会等の諸機関、関係諸氏に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査および整理作業に従事された方々にも深く感謝いたします。

平成15年7月

八千代市遺跡調査会
会長 萩原 康正

例 言

1. 本書は、「千葉県八千代市栗谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」である。
 2. 栗谷遺跡を3つの地区に分割し、各地区ごとに報告する予定である。報告書は、栗谷遺跡で3分冊となる予定である。
 3. 本書は、栗谷遺跡全3分冊のうちの第2分冊である。本書で報告する地区は、栗谷遺跡のⅡ地区である。
 4. 栗谷遺跡は、千葉県八千代市保品字中台谷1909-1外に所在する。
 5. 栗谷遺跡の発掘調査及び整理作業は、大成建設株式会社の委託により、千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。
 6. 発掘調査の実施期間、調査面積等については、第1章に記載した。
 7. 整理作業及び報告書刊行作業は、期間の前半を蔵茂美・武藤健一が、後半を朝比奈竹男・宮澤久史が担当し、平成13年10月1日～平成14年10月31日までの期間実施した。
 8. 本書の執筆・編集は宮澤久史が行った。
 9. 本書の図版作成及び編集・レイアウト作業は、一部を除き、DTP(Desktop Publishing=コンピュータによる版下作成)システムによるデジタル化を図り、伊勢田めぐみ(株式会社東京航業研究所)が担当した。
 10. 発掘調査における航空写真及び遺構図・全測図・地形図の作成は、要航業株式会社・株式会社東京航業研究所が行った。
 11. 整理作業及び報告書刊行作業におけるDTPシステムによるデジタル化作業全般において、株式会社東京航業研究所の協力を得た。
 12. 遺物の実測図及びトレース図の作成については、一部を除き株式会社東京航業研究所に委託した。
 13. 栗谷遺跡の内容については本書をもって正式報告とし、年報その他において公表された内容と相違する点については、本書の記述により訂正させていただくものとする。
 14. 発掘調査に伴う出土品及び図面・写真等の記録類は、八千代市教育委員会が保管している。
 15. 出土文字資料の判読・解説については、国立歴史民俗博物館平川南教授にご教授いただいた。
 16. 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の機関及び諸氏をはじめとする多くの方々からご指導、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)
- 千葉県教育庁文化財課・(財)印旛郡市文化財センター・(財)千葉県文化財センター・八千代市教育委員会・八千代市立郷土博物館
安藤広道・大沢孝・小川和博・菊池健一・黒沢浩・佐藤順一・田形孝一・平川南・深谷昇・藤岡孝司・村松篤・山岸良二

凡 例

1. 遺構番号は発掘調査時には、遺構種別ではなく調査地区ごとの通番号を付与した。遺物の注記、図面・写真への記録はこれによった。しかし、本書では遺構別に通番号を新たに付与し直した。この遺構番号については、第1章に新旧番号の対照表を掲載したので参照していただきたい。

2. 本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれも一部改変・合成して使用している。

図1 国土地理院発行 1/25,000地形図 「小林」「佐倉」「白井」「習志野」(平成12年発行)

図2 大成建設株式会社発行 1/4,000 Y. K. プロジェクト 空中写真測量図(昭和63年発行)

3. 本書の挿図において、方位の表示のないものについては、公共座標に基づく座標北を上としている。

4. 本書の遺構実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 図中及び本文中における方位は、公共座標に基づく座標北を示している。

(2) 縮尺率は原則として以下のとおりとするが、これ以外のものについては、図中に示したスケールを参照されたい。

住居跡 1/80 掘立柱建物 1/80 方形周溝墓 1/100 土坑 1/50 溝 1/50 炉穴 1/50

(3) 住居跡平面図に使用した一点鎖線は、床の硬化範囲を示している。

(4) 遺構実測図で使用した破線は、推定復元線を示している。

(5) 遺構実測中のスクリーントーンの表示は原則として以下のとおりであるが、個々については実測図脇に表示した凡例を参照されたい。



(6) 竈のある住居跡にあっては、長軸と短軸の距離及び方位は、各コーナーから対角線に線を引いた上で住居の中心を出し、その中心の壁間での計測値を出した。また、主軸は煙道にて計測した。

5. 本書の遺物実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 縮尺率は原則として以下のとおりであるが、個々については図脇に示したスケールを参照されたい。

土器実測図 1/4 土器拓影図 1/3 土製品 1/3 石器・石製品 1/2 1/3 1/4
鉄器・鉄製品 1/4 銅製品 1/2 支脚 1/4



(2) 遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下のとおりである。

(3) 墨書・朱書は以下のスクリーントーンで表現した。墨書・朱書は不明瞭な部分が多いため、明瞭な部分はベタ塗り、不明瞭な部分は20%のトーンをかけて処理した。さらに文字の輪郭がはっきりしている部分は緑取りを行った。なお、推定復元部分は破線で示した。



6. 本書の遺物写真における用例は以下のとおりである。

(1) 写真図版中における遺物番号は、本文中における遺物番号と一致している。

(2) 写真図版中の遺物写真縮尺は、墨書土器等を除き、概ね遺物実測図と同じとした。

7. 墨書土器の判別にあたっては、赤外線投射カメラによってモニター観察を行った。また、報告書の写真作成については、一部コンピュータによって画像処理を行い、読みやすくしたものがある。

8. 本書では土器に刻まれた文字のうち、土器の焼成前に刻まれたものを「窺（ヘラ）書」、土器の焼成後に刻まれたものを「線刻」として区分している。

9. 鉄製品及び銅製品については、株式会社東京航業研究所が、X線による撮影後、写真から実測を行った。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	
第1章 栗谷遺跡Ⅱ地区の概要	1
第1節 栗谷遺跡Ⅱ地区の調査の経緯	1
第2節 栗谷Ⅱ地区の調査の概要	3
第2章 遺構と遺物	6
第1節 縄文時代	6
(1) 炉穴	7
(2) 土坑	8
第2節 弥生時代・古墳時代	15
第1項 弥生時代中期	16
(1) 竪穴住居跡	17
(2) 土坑	30
(3) 方形周溝墓	31
第2項 弥生時代後期	47
(1) 竪穴住居跡	48
(2) 土坑	113
第3項 古墳時代前期	114
第4項 古墳時代後期	136
第3節 奈良・平安時代	137
(1) 竪穴住居跡	138
(2) 掘立柱建物跡	159
(3) 土坑	164
第4節 中世以降及び時期不明	166

第3章 小 結	175
第1節 縄文時代	175
第1項 竪穴住居跡について	175
第2項 土坑について	176
第3項 まとめ	177
第2節 弥生時代中期	178
第1項 出土遺物について	178
第2項 竪穴住居跡について	179
第3項 方形周溝墓について	182
第4項 まとめ—集落と墓域の關係を中心として—	184
第3節 弥生時代後期	185
第1項 蓋形土器と蓋形土器を出土する住居跡について	185
第2項 蓋形土器とその類例について	186
第3項 まとめ	188
第4節 古墳時代	189
第1項 竪穴住居跡の平面形等について	189
第2項 集落の変遷について	190
第3項 まとめ	193
第5節 奈良・平安時代	194
第1項 集落の群構成について	194
第2項 掘立柱建物跡について	195
第3項 墨書土器等	196
註	197

写真図版
報告書抄録

插图目次

图 1 栗谷遺跡位置図	1	图 39 C005 (2)	33
图 2 栗谷遺跡周辺地形図	2	图 40 C006	34
图 3 栗谷遺跡本調査地区割図	2	图 41 C006 (2)	35
图 4 栗谷遺跡基本土層図	3	图 42 C007	36
图 5 栗谷遺跡Ⅱ地区周辺遺構検出状況図	5	图 43 C008	37
图 6 縄文時代遺構配置図	6	图 44 C008 (2)	38
图 7 縄文時代遺構配置図	6	图 45 C009	39
图 8 F023	7	图 46 C010	40
图 9 F024	7	图 47 C011	42
图 10 F025	8	图 48 C012	43
图 11 D034	8	图 49 C013	44
图 12 D035	9	图 50 C014	45
图 13 D036	9	图 51 弥生時代後期遺構配置図	47
图 14 D037	9	图 52 A055	48
图 15 D038	10	图 53 A056	49
图 16 D039	10	图 54 A057	50
图 17 D040	10	图 55 A058	51
图 18 D041	11	图 56 A059	51
图 19 D042	11	图 57 A060	52
图 20 D043	11	图 58 A061	53
图 21 D044	12	图 59 A062	54
图 22 遺構外出土遺物	14	图 60 A063	55
图 23 弥生時代・古墳時代遺構配置図	15	图 61 A064	56
图 24 弥生時代中期遺構配置図	16	图 62 A065	57
图 25 A050	17	图 63 A066	58
图 26 A050 (2)	18	图 64 A066 (2)	59
图 27 A050 (3)	19	图 65 A067	60
图 28 A051	21	图 66 A068	61
图 29 A051 (2)	22	图 67 A068 (2)	62
图 30 A051 (3)	23	图 68 A069	63
图 31 A052	25	图 69 A069 (2)	64
图 32 A052 (2)	26	图 70 A070	66
图 33 A053	27	图 71 A071	67
图 34 A053 (2)	28	图 72 A072	68
图 35 A054	29	图 73 A072 (2)	69
图 36 D045	30	图 74 A073	70
图 37 C004	31	图 75 A074	71
图 38 C005	32	图 76 A074 (2)	72

図 77	A075	73	図117	A102	116
図 78	A076	74	図118	A102 (2)	117
図 79	A076 (2)	75	図119	A103	119
図 80	A077	75	図120	A104	120
図 81	A077 (2)	76	図121	A105	121
図 82	A078	77	図122	A106	122
図 83	A079	78	図123	A106 (2)	123
図 84	A080	79	図124	A107	124
図 85	A080 (2)	80	図125	A108	125
図 86	A081	82	図126	A109	127
図 87	A081 (2)	83	図127	A109 (2)	128
図 88	A081 (3)	84	図128	A110	130
図 89	A082	87	図129	A111	131
図 90	A083	88	図130	A112	132
図 91	A084	89	図131	A113	136
図 92	A085	90	図132	奈良・平安時代遺構配置図	137
図 93	A085 (2)	90	図133	A114	138
図 94	A086	91	図134	A115	139
図 95	A087	92	図135	A115 (2)	139
図 96	A087 (2)	93	図136	A116	140
図 97	A088	94	図137	A117	142
図 98	A088 (2)	95	図138	A118	143
図 99	A089	96	図139	A119	144
図100	A089 (2)	97	図140	A120	145
図101	A090	98	図141	A121	146
図102	A091	99	図142	A121 (2)	147
図103	A091 (2)	100	図143	A122	149
図104	A092	101	図144	A122 (2)	150
図105	A092 (2)	102	図145	A123	151
図106	A093	103	図146	A124	152
図107	A094	104	図147	A125	154
図108	A095	104	図148	A126	155
図109	A096	105	図149	A127	156
図110	A097	106	図150	B002	159
図111	A098	106	図151	B002 (2)	160
図112	A099	107	図152	B003	161
図113	D046	113	図153	B004	162
図114	古墳時代前期遺構配置図	114	図154	B005	163
図115	A100	114	図155	B006	163
図116	A101	115	図156	D047	164

図157	D048	165	図193	古墳時代前期堅穴住居跡の2類型	189
図158	D049	165			
図159	D050	166	図194	栗谷遺跡古墳時代前期堅穴住居跡	
図160	D051	167		主軸方位と規模	194
図161	D052	167	図195	A109出土遺物	191
図162	D053	168	図196	小形器台出土の住居跡	191
図163	D054	168	図197	小形器台の変遷	192
図164	D055	168	図198	土鍾出土の住居跡	192
図165	D056	169	図199	A002, A005, A006, A112出土遺物	193
図166	D057	169	図200	奈良・平安時代堅穴住居跡	
図167	D058	169		主軸方位と規模	194
図168	D059	169	図201	四面庇掘立柱建物跡の比較	195
図169	D060	169			
図170	D061	169			
図171	D062	170			
図172	D063	170			
図173	D064	170			
図174	D065	170			
図175	D066	170			
図176	D067	170			
図177	D068	171			
図178	D069	171			
図179	D070	171			
図180	I 001	173			
図181	E 001	174			
図182	栗谷遺跡縄文時代堅穴住居跡	175			
図183	A109	175			
図184	栗谷遺跡縄文時代陥穴	176			
図185	栗谷遺跡I・II縄文時代遺構集中区	177			
図186	栗谷遺跡宮ノ台期堅穴住居跡				
	主軸方位と規模	179			
図187	栗谷遺跡宮ノ台期における土器変遷	180			
図188	栗谷遺跡宮ノ台期方形周溝墓				
	主軸方位と規模	182			
図189	方形周溝墓の群構成	183			
図190	栗谷遺跡弥生時代後期堅穴住居跡				
	主軸方位と規模	185			
図191	蓋形土器と共存遺物について	186			
図192	あじき台遺跡出土遺物	188			

表 目 次

表 1	栗谷遺跡新旧遺構番号对照表	4	表41	A088遺物觀察表	95
表 2	縄文時代土坑一覽表	12	表42	A089遺物觀察表	97
表 3	縄文時代遺構外出土遺物	14	表43	A090遺物觀察表	99
表 4	A050遺物觀察表	20	表44	A091遺物觀察表	100
表 5	A051遺物觀察表	23	表45	A092遺物觀察表	102
表 6	A052遺物觀察表	26	表46	A093遺物觀察表	103
表 7	A053遺物觀察表	28	表47	A096遺物觀察表	105
表 8	A054遺物觀察表	30	表48	A099遺物觀察表	107
表 9	C006遺物觀察表	35	表49	竪穴住居跡一覽表	108
表10	C011遺物觀察表	42	表50	A100遺物觀察表	114
表11	方形周溝墓一覽表	46	表51	A101遺物觀察表	115
表12	A055遺物觀察表	48	表52	A102遺物觀察表	118
表13	A056遺物觀察表	49	表53	A103遺物觀察表	119
表14	A057遺物觀察表	50	表54	A104遺物觀察表	120
表15	A058遺物觀察表	51	表55	A105遺物觀察表	121
表16	A060遺物觀察表	52	表56	A106遺物觀察表	123
表17	A061遺物觀察表	53	表57	A107遺物觀察表	125
表18	A062遺物觀察表	54	表58	A108遺物觀察表	126
表19	A063遺物觀察表	55	表59	A109遺物觀察表	129
表20	A064遺物觀察表	56	表60	A111遺物觀察表	131
表21	A065遺物觀察表	57	表61	A112遺物觀察表	133
表22	A066遺物觀察表	59	表62	竪穴住居跡一覽表(2)	134
表23	A067遺物觀察表	60	表63	A113遺物觀察表	136
表24	A068遺物觀察表	62	表64	A115遺物觀察表	139
表25	A069遺物觀察表	65	表65	A116遺物觀察表	141
表26	A071遺物觀察表	67	表66	A117遺物觀察表	142
表27	A072遺物觀察表	69	表67	A118遺物觀察表	143
表28	A073遺物觀察表	71	表68	A119遺物觀察表	144
表29	A074遺物觀察表	72	表69	A120遺物觀察表	145
表30	A076遺物觀察表	75	表70	A121遺物觀察表	147
表31	A077遺物觀察表	76	表71	A122遺物觀察表	150
表32	A079遺物觀察表	79	表72	A123遺物觀察表	152
表33	A080遺物觀察表	81	表73	A124遺物觀察表	153
表34	A081遺物觀察表	84	表74	A125遺物觀察表	154
表35	A082遺物觀察表	87	表75	A126遺物觀察表	155
表36	A083遺物觀察表	88	表76	A127遺物觀察表	157
表37	A084遺物觀察表	89	表77	竪穴住居跡一覽表(3)	157
表38	A085遺物觀察表	90	表78	掘立柱建物跡一覽表	164
表39	A086遺物觀察表	92	表79	D050遺物觀察表	166
表40	A087遺物觀察表	93	表80	土坑一覽表(2)	171
			表81	栗谷遺跡出土文字資料一覽表	197

写真図版目次

- 図版1 空撮(1)弥生中期 住居跡 A050.A051.
A052
空撮(2)弥生中期 住居跡 A053.A054
- 図版2 空撮(3)弥生中期方形周溝墓
C004.C005.C006.C007.C008.C009
空撮(4)弥生中期 方形周溝墓
C011.C012.C013.C014
- 図版3 空撮(5)弥生時代後期 住居跡
空撮(6)弥生時代後期 住居跡
- 図版4 空撮(7)古墳時代前期 住居跡
空撮(8)奈良・平安時代 掘立柱建物跡
- 図版5 空撮(9)奈良・平安時代 掘立柱建物跡
その他、調査前現況、プラン検出状況(1)、
プラン検出状況(2)、プラン検出状況(3)
- 図版6 F023.F024.F025.D034.D035.D036.D037.
D038
- 図版7 D039.D040.D041.D042.D043.D044.A050.
A051
- 図版8 A052.A053.A054.D045.C004.C005.C006.
C006(2)
- 図版9 C007.C007主体部.C008.C008主体部.
C009.C010.C010主体部.C011
- 図版10 C012.C012主体部.C012主体部.C013
主体部.A055.A056.A057.A057(2)
- 図版11 A058.A059.A060.A061.A062.A063.
A064.A064(2)
- 図版12 A065.A066.A066(2).A067.A068.A069.
A070.A071
- 図版13 A072.A072(2).A073.A074.A075.A076.
A077.A079
- 図版14 A080.A080(2).A080(3).A081.
A081(2).A083.A084.A085
- 図版15 A086.A087.A088.A089.A092.A093
- 図版16 A094.A095.A096.A097.A098.A099.A100.
A101
- 図版17 A102.A102(2).A103.A103(3).A104.
A105.A106.A107
- 図版18 A107(2).A108.A109.A109(2).A110.
A111.A112.A113
- 図版19 A114.A115.A116.A117.A117(2).A118.
A118(2).A119
- 図版20 A120.A120(2).A121.A121(2).A122.
A122(2).A123.A125
- 図版21 A126.A127.A127(2) B006.D046.D048.
D049.D051
- 図版22 D059.D060.D061.D062.D061.D062.D063.
D064.D065.D066
- 図版23 D067.D069.D070.D034.D035.D044.
遺構外出土遺物
- 図版24 A050
- 図版25 A050(2)
- 図版26 A051
- 図版27 A051(2)
- 図版28 A052
- 図版29 A053.A054.D045.C005.C006
- 図版30 C008.C009.C010.C011.A055.A056.A057
- 図版31 A058.A061.A062.A063.A064.A065
- 図版32 A066.A067.A068
- 図版33 A069
- 図版34 A069(2).A071.A072
- 図版35 A072(2).A073.A074
- 図版36 A076.A077
- 図版37 A079.A080
- 図版38 A081
- 図版39 A081(2).A082.A083
- 図版40 A084.A085.A086.A087.A088
- 図版41 A089.A090.A091
- 図版42 A091(2).A092.A093.A096
- 図版43 A099.A100.A101.A102
- 図版44 A102(2).A103.A104
- 図版45 A105.A106
- 図版46 A107.A108.A109
- 図版47 A109(2)
- 図版48 A111.A112
- 図版49 A113.A115.A116
- 図版50 A117.A118.A119
- 図版51 A120.A121
- 図版52 A121(2).A122
- 図版53 A122(2).A123
- 図版54 A124.A125
- 図版55 A126.A127

第1章 栗谷遺跡Ⅱ地区の概要

第1節 栗谷遺跡Ⅱ地区の調査の経緯



図1 栗谷遺跡位置図 (1/50,000)

栗谷遺跡の発掘調査は(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連区域内における埋蔵文化財発掘調査の一環として、昭和63年3月から開始された。例言に記した通り、本報告は「(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書」のシリーズ3にあたる。事業全体に係わる経緯及び経過の詳細については、既刊の「栗谷遺跡-第1分冊-」を参照していただきたい。ここでは、栗谷遺跡Ⅱ地区の調査経緯について簡単に触れておきたい。

栗谷遺跡の発掘調査は、昭和63年3月から開始され平成6年7月までの間、断続的に実施された。栗谷遺跡Ⅱ地区にあたる地区は、第2次本調査地区(平成元年7月~平成2年10月)、第3次本調査地区(平成3年1月~平成3年12月)、第4次本調査地区(平成3年7月~平成4年6月)の一部が該当し、面積の合計は、約28,000㎡である。

調査方法としては、公共座標に沿って、グリッドを設定した。100m単位で大グリッドとし、10m単位で中グリッド、さらに、5m単位を小グリッドとして調査を行った。調査対象区域の1~2%程度を包含層検出の為の人力による表土除去作業を行い、包含層が検出されない区域については、重機による表土除去作業を行った。遺構検出作業は基本的にソフトローム上面で行った。写真撮影等の記録を取りながら遺構覆土の除去を実施した。撮影にはブローニー判モノクロフィルムを基本としながら35mmモノクロフィルム、及び35mmカラーリバーサルフィルムを使用した。測量については、通常の遣り方実測に加え、光波測距儀による測量、航空写真による測量を適宜用いて行った。

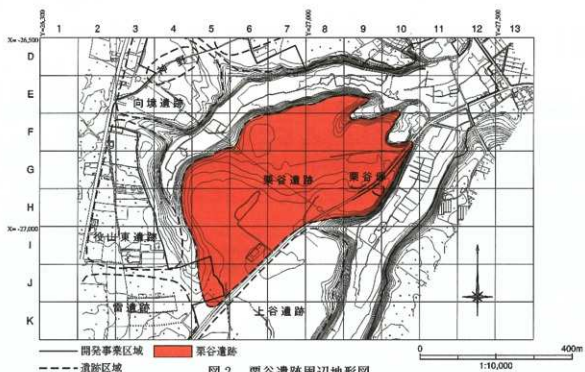


图2 栗谷遺跡周辺地形図

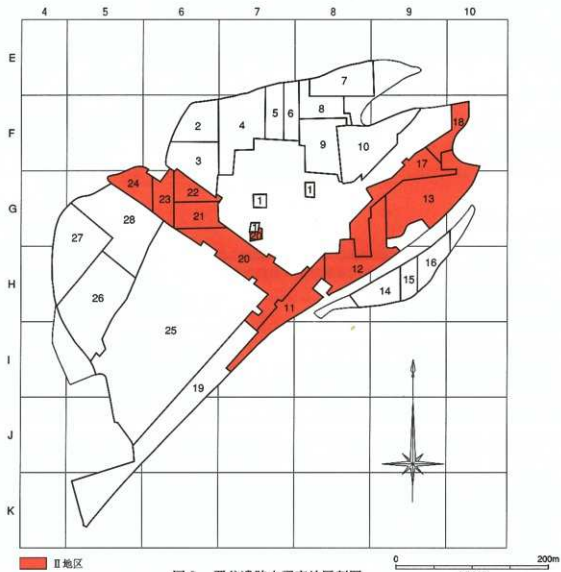


图3 栗谷遺跡本調査地区制図

第2節 栗谷Ⅱ地区の調査の概要

栗谷遺跡は、千葉県北西部の八千代市字保品に所在する。地形的には、下総台地の北西部に立地し、印旛沼、南岸に位置する。印旛沼周辺の台地は樹枝状の谷津によって解析され、その谷津に面して多くの遺跡が形成されている。栗谷遺跡もそうした遺跡の一つで、標高21m～24mの舌状台地上に展開する。

栗谷遺跡の周辺遺跡として遺跡中央を東西に入る小支谷を隔てた南側に上谷遺跡、遺跡南西側に雷遺跡、遺跡北側の谷を隔てた別の台地に役山東遺跡、向境遺跡、境掘遺跡、神野群集塚が所在する。中でも上谷遺跡は同一の台地上に展開する為、集落展開等を分析する際には2遺跡をセットにして検討する視点が必要となるだろう。

検出された遺構は次のとおりである。縄文時代については早期の炉穴3基、土坑11基。弥生時代・古墳時代については、竪穴住居跡64軒、方形周溝墓11基、竪穴状遺構3基。奈良・平安時代については、竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡5棟、土坑3基。時期不明(中近世)の土坑21基、溝1条、その他の遺構1基が検出されている。

遺構外出土遺物については、栗谷Ⅱ地区の出土遺物数から比べると少ない。傾向としては、縄文時代早期の条痕文系土器群と中期加曾利E期から後期加曾利B期にかけての土器がめだつ。

また、遺跡の基本層序であるが、第Ⅰ層が表土層(褐色土層)、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層暗褐色土層、第Ⅳ層ソフトローム漸移層、第Ⅴ層ソフトローム層、第Ⅵ層ハードローム層となる。遺構検出にあたっては、第Ⅳ層下面あるいは第Ⅴ層上面で行った。

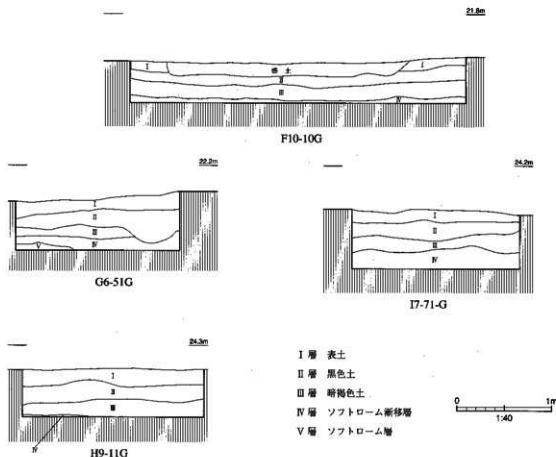


図4 栗谷遺跡基本土層図

表1 栗谷遺跡新旧遺構番号対照表

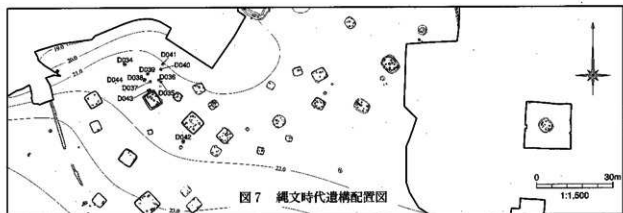
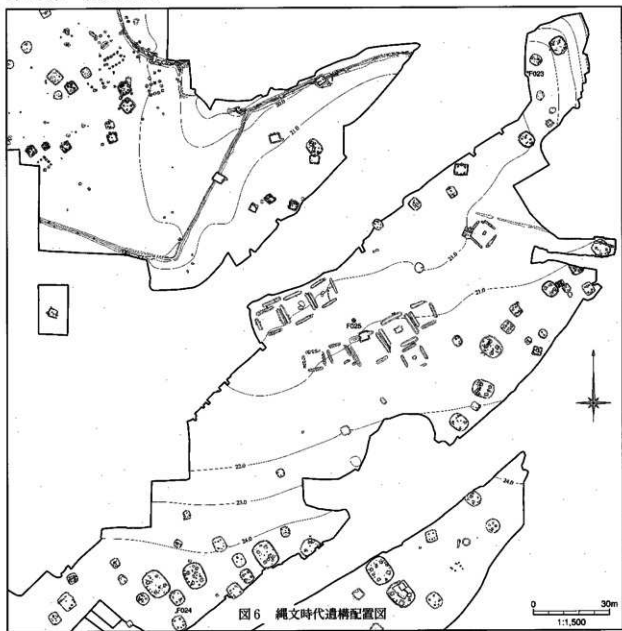
新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
竪穴住居跡		A088	20-002	A127	11-002	D053	13-016
A050	18-001	A089	20-003	掘立柱建物		D054	13-021b
A051	18-002	A090	20-011	B002	11-015	D055	13-026b
A052	18-006	A091	22-001	B003	20-004	D056	12-005b
A053	13-032	A092	22-006	B004	20-005	D057	12-018
A054	13-031	A093	13-030	B005	20-006	D058	12-019
A055	17-002	A094	13-002	B006	12-024	D059	11-017
A056	17-004	A095	13-001	方形周溝墓		D060	11-019
A057	17-001	A096	12-021	C004	13-003	D061	20-007
A058	17-003	A097	12-006	C005	13-004	D062	20-008
A059	13-033	A098	12-005a	C006	13-005	D063	20-009
A060	13-028	A099	12-001	C007	13-006,14	D064	20-013
A061	13-027	A100	21-002	C008	13-007,15	D065	21-005
A062	13-025	A101	21-004	C009	13-008	D066	22-007
A063	13-023	A102	22-002	C010	17-006	D067	22-008
A064	13-021a	A103	22-003	C011	17-007	D068	24-002c
A065	13-022	A104	22-004	C012	17-008	D069	24-006
A066	13-020	A105	22-005	C013	17-009	D070	24-014
A067	13-019	A106	23-001	C014	17-010	溝	
A068	13-018	A107	23-002	土坑		E001	20-012
A069	13-017	A108	23-003	D034	24-003	炉穴	
A070	12-017	A109	23-004	D035	24-007	F023	18-009
A071	12-016	A110	23-005	D036	24-008	F024	12-020
A072	12-015	A111	24-001	D037	24-009	F025	13-010
A073	12-013	A112	24-002ab	D038	24-010	その他の遺構	
A074	12-012	A113	11-016	D039	24-011	I001	13-009
A075	12-011	A114	18-004	D040	24-012		
A076	12-014	A115	18-005	D041	24-013		
A077	12-010	A116	18-007	D042	24-015		
A078	12-009	A117	17-005	D043	24-016		
A079	12-008	A118	13-026a	D044	24-017		
A080	12-007	A119	13-024	D045	18-008		
A081	12-004	A120	12-022	D046	11-009		
A082	12-003	A121	11-010	D047	11-006b		
A083	12-002	A122	11-008	D048	20-010		
A084	11-012	A123	11-006a	D049	23-006		
A085	11-013	A124	11-005	D050	13-011		
A086	11-011	A125	11-004	D051	11-018		
A087	20-001	A126	11-003	D052	13-013		



图5 栗谷遺跡Ⅱ地区および周辺遺構検出状況図

第2章 遺構と遺物

第1節 縄文時代



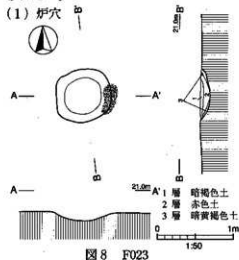
栗谷遺跡Ⅱ地区における縄文時代の遺構は、炉穴3基及び土坑11基が検出されているのみである。Ⅰ地区で報告された堅穴住居跡、陥穴、その他の遺構は検出されていない。

炉穴の立地であるが、強いてあげるならば、栗谷遺跡の台地北側縁部に立地している傾向があるものの、Ⅰ地区の状況を含めて概観しても、炉穴に特定の集中地点は無く、台地全体に散在している感がある。形態的特徴としては、いずれの炉穴も小規模で、掘り込みが浅く、窪み状のピットである。燃焼部の状況も熱を強く受けた状況の炉穴は少なく、うっすらと赤化している状態で、覆土についても火床に明確な焼土層を持つものは無い。出土遺物が無いため、詳細な時期決定は困難であるが、栗谷遺跡及び上谷遺跡をはじめとする周辺遺跡の調査例から、早期条痕文期の炉穴であると考えられる。

また、土坑の立地についてであるが、台地北側縁部に集中して立地している傾向がある。時期は出土遺物から中期後半～後期の土坑と考えられる。

遺構外の遺物の出土例は栗谷Ⅱ地区全体から比較すると少なかった。傾向としては、検出された遺構と同じく中期後半～後期にかけての遺物が中心であった。本報告では、中期後半～後期の遺物を中心に代表的な遺物10点を報告する。

以下、個別の遺構についての報告に移りたい。詳細は以下の記述、遺構一覧表及び遺物観察表を参照されたい。



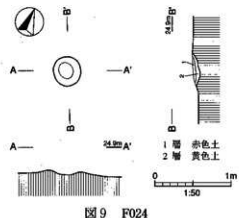
F023
 検出地区 F10-3G
 遺構 長軸0.7m、短軸0.7m、深さ0.12m、主軸方位E-2°Sの炉穴である。平面形は小型の不整形円形で、ロームを浅く掘り込んだ皿状の炉穴である。

覆土は色調を基本として3層に分層でき、自然堆積と考えられる。2層からは焼土を検出しているが、炉穴、使用時に形成された焼土と判断した。

火床は、部分的に激しく熱を受け、赤色化、劣化が著しい部分がある。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 出土遺物からの検証を欠くが、覆土の観察及び遺構の規模、形態等から早期の炉穴と判断した。



F024
 検出地区 H8-75G
 遺構 長軸0.38m、短軸0.36m、深さ0.1m、主軸方位N-53°Wの炉穴である。平面形は小型の不整形円形でロームを浅く掘り込んだ皿状の炉穴である。

覆土は色調を基本として2層に分層でき、自然堆積と考えられる。1層からは焼土を検出しているが、炉穴、使用時に形成された焼土と判断した。

火床は、あまり熱を受けている様相は見受けられず、赤色化、劣化も進んでいなかった。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 出土遺物からの検証を欠くが覆土の観察及び遺構の規模、形態等から早期の炉穴と判断した。

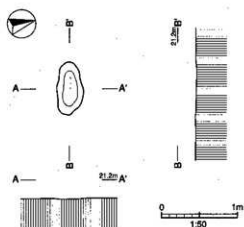


図10 F025

(2) 土坑

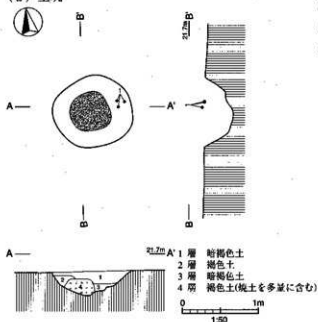


図11 D034

D034

検出地区 G5-82G

遺構 長軸1.0m、短軸0.94m、深さ0.3m、主軸方位N-72°-Wの土坑である。平面形は小型の不整形円形で、楕形の断面形を呈する。立ち上がりは、やや内彎しながら斜めに立ち上がってゆく。

覆土は色調を基本として4層に分層され、4層に多量に焼土を含むものの、概ね自然堆積と考えられる。

遺物 出土遺物は少量であった。1は、深鉢の底部から胴部下半で、無文である。底径86mm、残存器高67mmである。焼成は良好で、内面外面ともに褐色を呈する。内面外面ともに篋による磨きを施している。称名寺期の深鉢と考えられる。2は、深鉢の口縁部片である。焼成は良好で、内面外面ともに褐色を呈する。外面は沈線による区画を施し、縄文を充填している。称名寺期と考えられる。

所見 覆土に焼土を含み、火床も赤色化、劣化も進んでいるが、出土遺物から縄文時代後期、称名寺期の土坑と判断した。

F025

検出地区 G9-43G

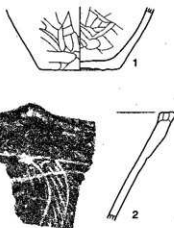
遺構 長軸0.7m、短軸0.36m、深さ0.02m、主軸方位N-77°-Wの炉穴である。平面形は小型の不整形円形で、ロームをわずかに掘り込んだ皿状の炉穴である。

遺構検出時に僅かな焼土を検出したため、調査に及んだ。掘り込みが極めて浅いため、覆土の分層には至らなかった。

火床は、あまり熱を受けている様相は見受けられず、赤色化、劣化も進んでいなかった。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 出土遺物からの検証を欠くが覆土の観察及び遺構の規模、形態等から縄文時代早期の炉穴とした。



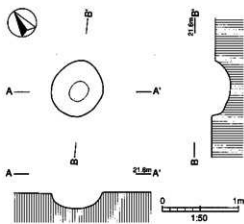


図12 D035

D035

検出地区 G6-2G

遺構 長軸0.74m、短軸0.64m、深さ0.2m、主軸方位N-46°-Eの土坑である。平面形は小型の不整形形で、断面は概ね皿状を呈する。底部はほぼ平坦で、斜めに直線的に立ち上がってゆく。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。1は、深鉢の口縁部片である。焼成は良好で、内面外面ともに褐色を呈する。外面は沈線文を施している。覆土中から黒曜石のフレイク1点と熱を受けた礫1点を出土している。

所見 出土遺物から縄文時代後期、堀之内期の土坑と判断した。

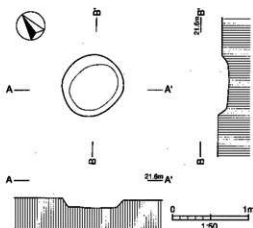


図13 D036

D036

検出地区 G6-2G

遺構 長軸0.8m、短軸0.76m、深さ0.34m、主軸方位N-88°-Eの土坑である。平面形は小型の不整形形で、掘り込みの浅い皿状の断面形を呈する。底部は、ほぼ平坦で、斜めに直線的に立ち上がってゆく。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 出土遺物から縄文時代後期、加曾利B期の土坑と判断した。

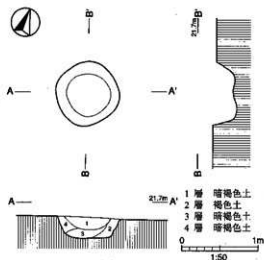


図14 D037

D037

検出地区 G5-92G

遺構 長軸0.8m、短軸0.8m、深さ0.28m、主軸方位N-37°-Eの土坑である。平面形は小型の不整形形で、比較的しっかりと掘り込まれている。底部は、若干の凹凸はあるものの、ほぼ平坦で、斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は暗褐色土系の土層で、色調を基本に4層に分層され、自然堆積と考えられる。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 出土遺物から縄文時代中期～後期の土坑と判断した。

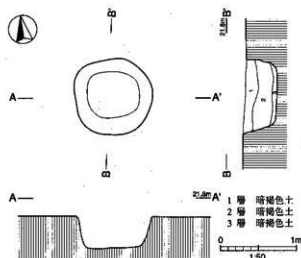


図15 D038

D038

検出地区 G5-92G

遺構 長軸1.02m、短軸1.0m、深さ0.42m、主軸方位N-93°-Eの土坑である。平面形は不整形で、比較的しっかりと掘り込まれている。底部は、ほぼ平坦で、斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は暗褐色土系の土層で、色調を基本に3層に分層され、自然堆積と考えられる。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 出土遺物から縄文時代中期～後期の土坑と判断した。

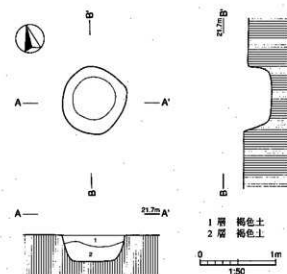


図16 D039

D039

検出地区 G5-92G

遺構 長軸0.85m、短軸0.8m、深さ0.34m、主軸方位N-35°-Eの土坑である。平面形は小型の不整形で、比較的しっかりと掘り込まれている。底部は、ほぼ平坦で、斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は褐色土系の土層で、色調を基本に2層に分層され、自然堆積と考えられる。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 出土遺物から縄文時代中期～後期の土坑と判断した。

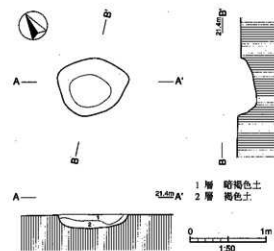


図17 D040

D040

検出地区 G6-2G

遺構 長軸0.9m、短軸0.74m、深さ0.18m、主軸方位N-110°-Eの土坑である。平面形は小型の不整形で、掘り込みの浅い窪み状の断面形を呈する。底部は、ほぼ平坦で、南側は直線的に、北側はなだらかに立ち上がってゆく。

覆土は暗褐色土系の土層で、色調を基本に2層に分層され、自然堆積と考えられる。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 出土遺物から縄文時代中期～後期の土坑と判断した。

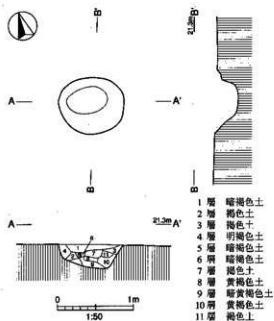


図18 D041

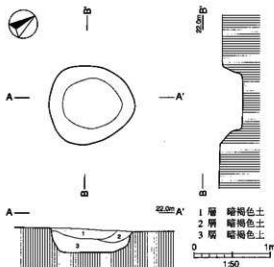


図19 D042

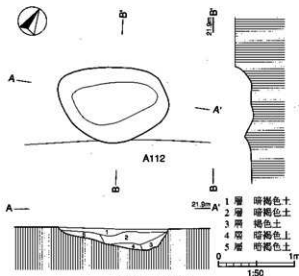


図20 D043

D041

検出地区 G6-2G

遺構 長軸0.86m、短軸0.76m、深さ0.32m、主軸方位N-108°-Eの土坑である。平面形は小型の不整形形で、比較的しっかりと掘り込まれている。底部は、ほぼ平坦で、斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は色調を基本に11層に分層され、1層に少量の焼土を含み、人為的堆積と考えられる。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 出土遺物から縄文時代中期～後期の土坑と判断した。

D042

検出地区 G6-15G

遺構 長軸1.1m、短軸1.04m、深さ0.3m、主軸方位N-37°-Eの土坑である。平面形は不整形形で、比較的しっかりと掘り込まれている。底部は、ほぼ平坦で、斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は暗褐色土系の土層で、色調を基本に3層に分層され、自然堆積と考えられる。

遺物 覆土中から小破片が1点出土。

所見 出土遺物から縄文時代中期～後期の土坑と判断した。

D043

検出地区 G5-93G

遺構 長軸1.38m、短軸1.0m、深さ0.28m、主軸方位N-55°-Eの土坑である。A112と重複関係に有るが、覆土の観察から本土坑の方が古いと判断した。平面形は不整形で、掘り込みの浅い窪み状の断面形を呈する。底部は、ほぼ平坦で、東側は直線的に、西側は、なだらかに立ち上がってゆく。

覆土は暗褐色土系の土層で、色調を基本に5層に分層され、自然堆積と考えられる。

遺物 覆土中から小破片出土。

所見 出土遺物から縄文時代中期～後期の土坑と判断した。

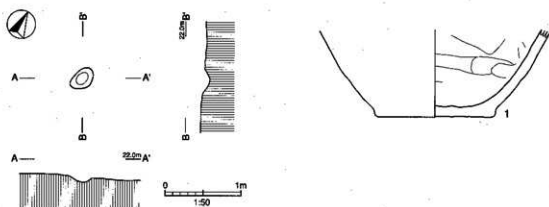


図21 D044

D044

検出地区 G5-82G

遺構 長軸0.34m、短軸0.24m、深さ0.08m、主軸方位N-20°-Eの土坑である。平面形は小型の不整形円で、掘り込みの浅い窪み状の断面形を呈する。底部は、丸みをもち、なだらかに立ち上がってゆく。D034に隣接する。

覆土は土坑の範囲とほぼ同規模の深鉢が出土していたため、観察できなかった。

遺物 深鉢1点出土。1は、深鉢の底部から胴部下半で、無紋である。底径128mm、残存器高93mmで有る。焼成は良好で内外面ともに褐色を呈し、内外面ともに筥による磨きを施している。縄文時代中期後半から後期にかけての深鉢と考えられる。

所見 出土遺物から縄文時代中期～後期の土坑と判断した。性格は、遺物の出土状況から埋蓋の可能性が高い。隣接するD034は、焼土を含む縄文時代後期の土坑と考えられ、また、周囲の土坑についても縄文時代中期から後期にかけての時期が考えられている。このことから、D034と本土坑を中心とした地区に縄文時代後期の住居跡があった可能性がある。

表2 縄文時代 土坑一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
D-034	G5-82	不整形円形 主軸 1.0×0.94×0.3 N-72°-W	色調から4層に分層。 覆土中から小破片出土。	出土遺物から後期弥生寺 期の土坑と考えられる。
D-035	G6-2	不整形円形 主軸 0.74×0.64×0.2 N-46°-E	覆土中から小破片出土。黒曜石片出土。	出土遺物から後期縄文之内 期の土坑と考えられる。
D-036	G6-2	不整形円形 主軸 0.8×0.76×0.34 N-88°-E 浅く皿状の土坑	覆土中から小破片出土。	出土遺物から後期加賀川 B期の土坑と考えられる。
D-037	G5-92	不整形円形 主軸 0.8×0.8×0.28 N-37°-E	暗褐色土系の土層で4層に分層。 自然堆積。 覆土中から小破片出土。	出土遺物から中期～後期 の土坑と考えられる。

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
D-038	G5-92	不整形 主軸 1.02×1.0×0.42 N-93°E	暗褐色土系の土層で3層に分層。 自然堆積。 覆土中から小破片出土。	出土遺物から中期～後期の土坑と考えられる。
D-039	G5-92	不整形 主軸 0.85×0.8×0.34 N-35°E	褐色土系の土層で2層に分層。 自然堆積。 覆土中から小破片少量出土。	出土遺物から中期～後期の土坑と考えられる。
D-040	G6-2	不整形 主軸 0.9×0.74×0.18 N-110°E	暗褐色土系の土層で2層に分層。 自然堆積。 覆土中から小破片少量出土。	出土遺物から中期～後期の土坑と考えられる。
D-041	G6-2	不整形 主軸 0.86×0.76×0.32 N-108°E	色調から11層に分層。1層に少量の焼土を含む。人為的な堆積。	出土遺物から中期～後期の土坑と考えられる。
D-042	G6-15	不整形 主軸 1.1×1.04×0.3 N-37°E	暗褐色土系の土層で3層に分層。 自然堆積。 覆土中から小破片1点出土。	出土遺物から中期～後期の土坑と考えられる。
D-043	G5-93	不整形 主軸 1.38×1.0×0.28 N-55°E	暗褐色土系の土層で5層に分層。 自然堆積。 覆土中から小破片出土。	出土遺物から中期～後期の土坑と考えられる。
D-044	G5-82	楕円形 主軸 0.34×0.24×0.08 N-20°E 浅く皿状の土坑	土坑の規模・形態とほぼ同様の溝跡底部～胴部片が出土。	出土遺物から中期～後期の土坑と考えられ、埋塞の可能性あり。

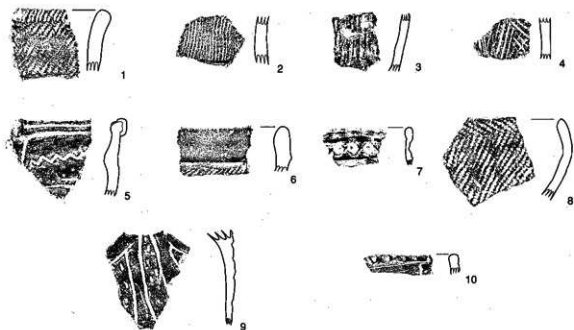


図22 遺構外出土遺物

表3 縄文時代 遺構外出土遺物

(単位cm)

No	種別 器形	注 量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁部-外反 口唇部・口縁部にLRの縄文	褐 硬	雲母少 白色少	口縁 部片	H9-55G出土 井草
2	縄文 深鉢	胴部-然糸文を施文	暗褐 硬	雲母微 長石微 白色微	胴部片	I7-43-4G出土 夏島
3	縄文 深鉢	外面 タテの貝殻条痕 内面 ヨコ及びバナメの貝殻条痕	褐 硬	雲母微 植物繊維 含む	胴部片	H8-33-3G出土
4	縄文 深鉢	外面 タテ・ナメの貝殻条痕 内面 ナメの貝殻条痕	小褐 普	雲母微 植物繊維 含む	胴部片	H8-33-1G出土
5	縄文 深鉢	口縁部に細い皮帯。隆帯上に半截竹管による押し引きの沈線 口縁部下に蛇行した沈線	褐 硬	雲母少	口縁 部片	G6-5-1G出土 五領ヶ台
6	縄文 深鉢	口縁部下端を微隆起させる 胴部-LRの縄文	淡褐 軟	雲母微 黒色・ 白色	口縁 部片	G10-20-1G出土 加曾利E
7	縄文 深鉢	外面 幅広い沈線を口縁に引き、中に円形の連続刺突文 内面 剥離のため不明	褐 硬	雲母微 白色	口縁 部片	F6-96-4G出土 加曾利E
8	縄文 深鉢	外面 全面LR屈節斜縄文 内面 横位のミガキ	褐 普	雲母微 白色	口縁 部片	H8-1-1G出土 加曾利E
9	縄文 深鉢	外面 半截竹管によるワの字、又は×字状に沈線で区画し、区画内に 連点を施す 内面 ミガキ	黒褐 普	雲母微 石英・ 白色	口縁 部片	H8-7-1G出土 称名寺
10	縄文 深鉢	口縁-粘土紐を貼付し指頸押文 口縁部下端-沈線	暗褐	雲母微 白色	口縁 部片	G9-63-1G出土 安行I

第2節 弥生時代・古墳時代



图23 弥生時代・古墳時代遺構配置図

栗谷遺跡Ⅱ地区における弥生・古墳時代の遺構は、竪穴住居跡64軒、方形周溝墓11基、その他の遺構3基が検出されている。ここでは弥生時代後期から古墳時代前期の遺構については時期区分の問題もあるので、一括して扱うこととした。この内、弥生時代中期宮ノ台期に属する遺構が、竪穴住居跡5軒、方形周溝墓11基、その他の遺構1基検出されている。弥生時代後期から古墳時代に属する遺構は、竪穴住居跡59軒が検出されている。

集落の立地であるが、何れの時期の集落も台地縁辺部に立地している。まず、宮ノ台期の集落は、舌状台地の先端部にあたる台地北東部縁辺に立地している。そして、集落に対して台地の奥にあたる地点を、墓域として利用し、方形周溝墓群が展開している。北東部縁辺部は、調査時既に土取りがされていて、さらには、調査区外の地区もあるため、宮ノ台期の実際の竪穴住居跡数は調査軒数よりも増加すると思われる。このことは、検出された竪穴住居跡が5軒に対して方形周溝墓が11基検出されていることから窺える。

後期の集落の立地については、栗谷Ⅰ地区の状況を含めて概観すると、台地全体に展開し、その中でも台地南側縁辺部に集中区があり、特に大形住居跡を中心として展開する。栗谷遺跡における弥生時代後期の集落の出土遺物からの特徴として、所謂、印旛・手賀沼系土器群(以下、印手系と略)を主体として出土し、南関東系の土器群を客体として出土する住居跡を中心に展開している。

また、時期区分の問題もあるが、古墳時代前期の集落は、台地北側縁辺部の一角に展開する。栗谷Ⅰ地区と今回報告するⅡ地区に跨る一角であり、栗谷遺跡の古墳時代前期の集落展開を検討する際には、これらを一まとめにして検討する視点が必要である。

栗谷遺跡の弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落を検出遺構数を中心に概観したが、集落の中心時期は、弥生時代後期にあたり、その集落は、印手系土器を主体として出土していることが窺える。

以下、個別の遺構についての報告に移るが、詳細については、以下の記述、遺構一覧表及び遺物観察表を参照されたい。

第1項 弥生時代中期

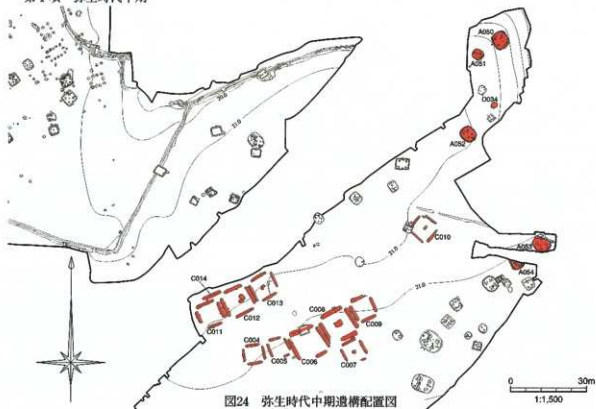


図24 弥生時代中期遺構配置図

(1) 竪穴住居跡

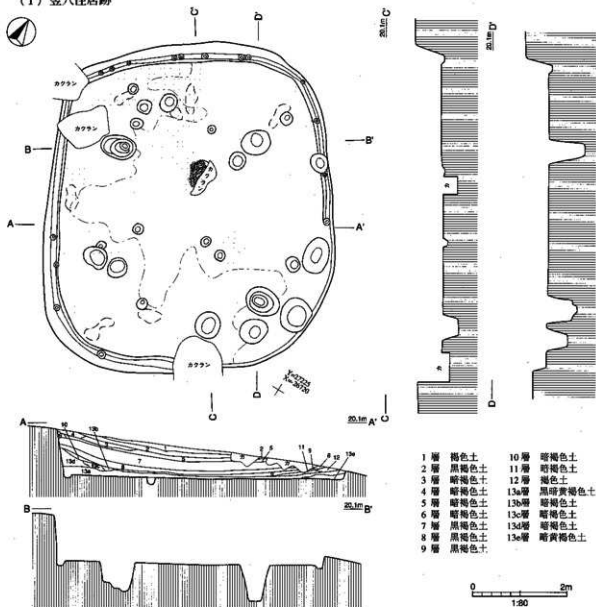


図25 A050

A050

検出地区 F10-22G。台地北東部先端に位置し、傾斜が始まった部分に立地している。

遺構 長軸6.9m×短軸5.95m×深さ0.9m、主軸方位N-31°-W、兩丸長方形の竪穴住居跡である。床はローム面を踏み固めた平坦な床で、住居跡南側を除き硬化面が広範囲に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ、垂直に立ち上がる。周溝は約3/4周し、幅は約18cmであった。主柱穴は4本でピットの配置から住居跡の建て替え、あるいは、拡張の可能性がある。炉は床を浅く掘り窪めた地床炉で住居跡中央やや北側による。

覆土は、色調を基本に17層に分層された。火災による焼失後、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて、土器を中心に大量に出土した。(7)は変形土器で底部に焼成後、底部が穿孔されている珍しい例で、本遺跡に同様の例としては、A052出土の変形土器が挙げられる。(13)は、後期の土器になるが、覆土上層、攪乱内出土であった。

所見 出土遺物から弥生時代中期、宮ノ台期の竪穴住居跡と考えられる。また、焼土検出状況および遺物出土状況から火災による焼失住居と考えられる。

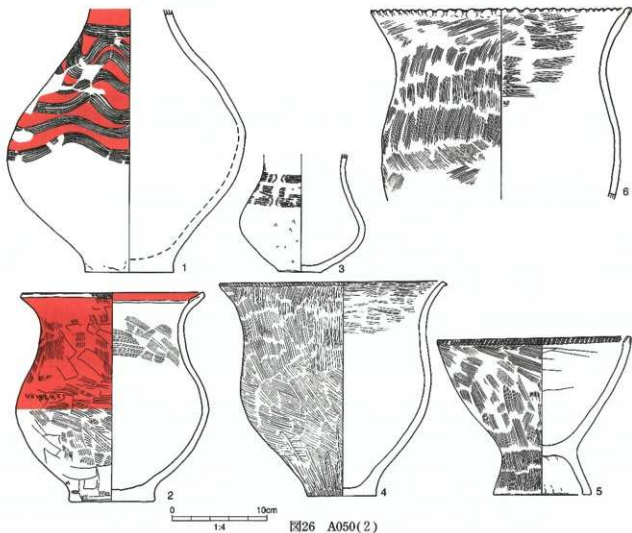
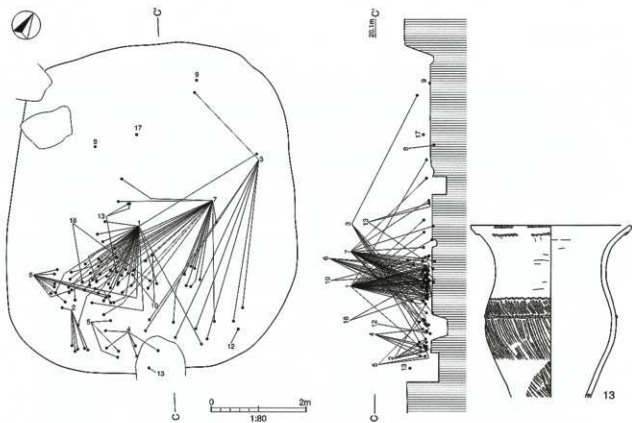


图26 A050(2)

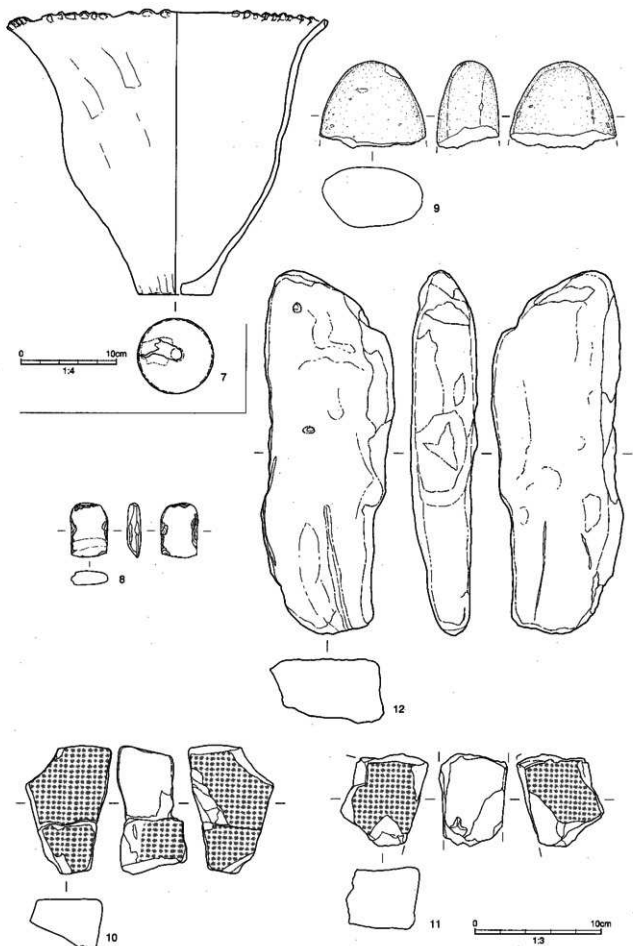


图27 A050(3)

表4 A050 遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	粘土	重存	備考
1	弥生 甕	一×9.40×(28.5) 胴部一帯横線走文 胴部一帯横波状文 胴部やや下半に最大径 外部一全面に赤彩か	明橙褐 普	粗 砂粒多	2/3	
2	弥生 広口甕	19.5×9.2×22.3 内面 口縁頸部にハケ 外面 口唇部一帯似縄文 口縁部から胴部上半縦位のハケ 胴部下半斜位のハケ ハケ調整後全体に丁寧なミガキを施す。	褐 硬	普	完形	複合口縁 赤採胴部中位～ 口縁折返し部分
3	弥生 小型甕	一×4.50×(12.5) 頸～胴上半部一帯横線似流水文	明橙褐 軟	粗 粗砂粒多	2/3	
4	弥生 甕	24.1×7.30×22.9 口唇部一帯状工具による刺突 口縁～胴上半部一ハケ 胴中位一ハケ 胴下半部一ハケ後ヘラミガキ	褐 普	普 砂粒多	完形	
5	弥生 台付鉢	20.3×10.2×16.9 口縁部一ハケ状工具による刻み目 胴部一不定方向のハケ 脚部一タテハケ	暗褐 硬	密 砂粒多	完形	
6	弥生 甕	27.6×一×(20.4) 口唇部一帯状工具による押圧 口縁部一ヨコハケ 頸～胴上半部一タ テハケ 胴下半部一ナナメハケ	明橙褐 普	普 砂粒多	1/2	
7	弥生 甕	(34.2)×8.00×30.3 輪積 外面 口唇部一帯状工具による押圧 胴部一ナデ 下端ヘラケズリ 内面 ナデ 口縁一外反 底部一平底、穿孔有	明橙褐 軟	普 砂粒多	2/3	
8	扁平片刃 石斧	4.20×2.90×1.10 全面研磨され、平滑である。全体に使用に伴う破損も顕著			完形	玄武岩
9	石製品 磨石	6.90×8.40×4.90 平面形は楕円形に近く、側面を中心に磨痕が顕著			1/2	安山岩
10	石製品 砥石	13.6×8.60×7.30 二面に良好な磨痕。火熱を受け赤変			破損が 甚だし い	砂岩
11	石製品 砥石	9.80×9.10×7.30 二面に良好な磨痕がみられる。火熱を受けて赤変			破損が 甚だし い	砂岩
12	石製品	38.5×14.0×6.90 5380g 大型の板状の石。明瞭な加工痕はみられないが、片面の2ヶ所に鎌状 の工具を用いたような凹みをもつ。				
13	弥生 甕	17.0×一×(18.3) L1号一帯斜縄文 口縁は複合を呈し、下端に連続圧痕施した粘土紐を 貼付 頸部一ヘラナデ 胴部上半一結節1段→半節斜縄文→口縁下端と 同じ粘土紐を貼付 胴部下半一熟赤文	褐 普	普 砂粒多	2/3	カクラン中出土

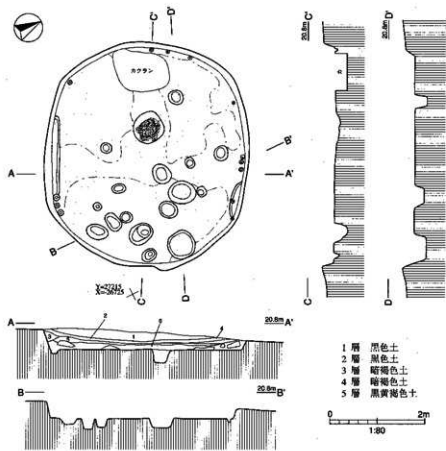


図28 A051

A051

検出地区 F10-13G。台地北東部先端に位置し、傾斜がやや始まった部分に立地している。

遺構 長軸4.7m×短軸4.2m×深さ0.44m、主軸方位N-60°-W、小判形の堅穴住居跡である。床はローム面を踏み固めた平坦な床で、一部に硬化面が広がる。壁はロームの壁で、直線的に急傾斜で立ち上がる。周溝は一部で検出し、幅は約18cmであった。調査した、いずれのビットも配置が悪く、掘り込みが浅く、柱穴については不明。炉は床を浅く掘り窪めた地床炉で住居跡中央やや北西側によっていた。

覆土は、色調を基本に5層に分層された。火災による焼失後、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて、土器・石器を中心に大量に出土している。特に石器について良好な資料が出土している。

所見 出土遺物から弥生時代中期、宮ノ台期の堅穴住居跡と考えられる。また、焼土検出状況および遺物出土状況から火災による焼失住居と考えられる。

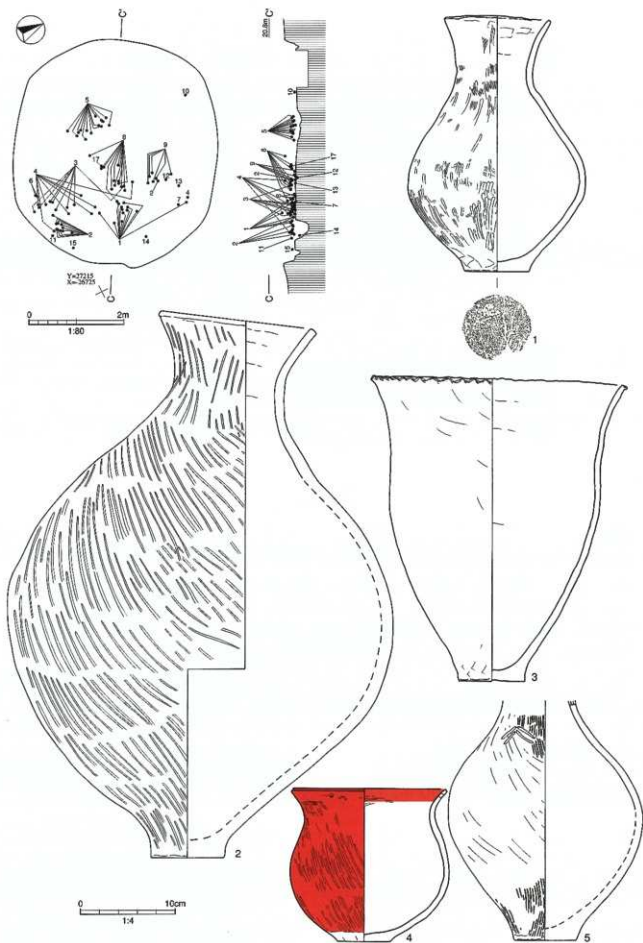


图29 A051(2)

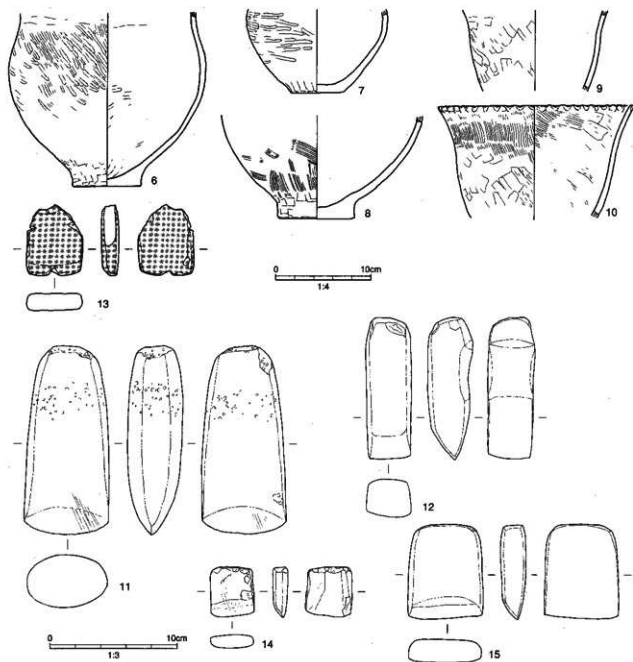


図30 A051 (3)

表5 A051 遺物観察表

(単位:cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色 調	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	11.3×7.00×27.2 口唇部-ナテ 口縁-胴上半部-ハケ後ヘラミガキ 胴中位-下半部-ハケ後ヘラミガキ 下端-ヘラケズリ		褐 陶 青	粗 砂 粒	2/3	
2	弥生 壺	16.8×7.80×58.0 輪積 外面 口縁-頸部-タテの染灰文 胴部-ナナメの染灰文 内面 ナ テ 口縁-外反 頸部-細くくびれる 胴部-球胴状 底部-平底		赤 褐 青	普 砂 粒多	完形	
3	弥生 壺	27.2×7.00×32.5 輪積 外面 口唇部-棒状工具による押圧 胴部-ナテ 下端-ヘラケズリ 内面 ナテ 口縁-やや外反 胴部-長胴 底部-平底		褐 軟	密 砂 粒多	完形	内外面コゲ・ スス付着 二次的なもの

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
4	弥生 広口壺	(16.6)×5.40×16.2 口縁部→ナデ後ヘラミガキ 胴部→ヘラミガキ 下端→ヘラケズリ	暗褐色 硬	密 砂粒多	2/3	赤彩
5	弥生 壺	→6.40×(25.5) ヘラナデを主として、上部と下部に条痕文 胴上部に結縷文が退化したようなヘラ描文	明褐色 硬	密 砂粒 雲母多	2/3	
6	弥生 壺	→7.10×(18.5) 輪積 外面 ナデ後ヘラミガキ 下端→ヘラケズリ 内面 ナデ 胴部→球脚状 底部→平底	明褐色 軟	普 砂粒少	2/3	
7	弥生 小型壺	→5.50×(8.90) ヘラナデ後ヘラミガキ→ナデ→下端ヘラケズリ	暗褐色 普	普 粗砂粒多	1/4	
8	弥生 壺	→8.10×(11.1) ナナメ・タテのハケ	暗褐色 軟	普 粗砂粒少	1/4	
9	弥生 壺	→→(8.50) ナナメの強いヘラナデ	暗褐色 軟	粗 砂粒多	胴部 破片	
10	弥生 壺	20.7×→(12.2) 口唇部→押圧 口径→胴部→タテのハケ 胴部→ナナメのヘラナデ	褐色 普	普	1/2	
11	大型 片刃 石斧	15.0×6.70×4.40 上端は「平基」に近く、刃部が広がる。 全面研磨され平滑であるが、敲打痕をもち、基部にも着柄痕が認められる				花崗閃緑岩
12	柱状 片刃 石斧	11.3×3.70×3.60 全面研磨され平滑。上端部に敲打痕				玄武岩
13	石製品 砥石	7.00×5.90×1.90 扁片刃石斧と思われるが、全体に破損が甚だしく、刃部も二次的な 研磨により、鋭角をなしていない事から、砥石として転用された				玄武岩
14	扁片刃 石斧	3.90×3.50×1.20 平面形は方形に近い。全面研磨されるが、上端部は敲打痕が顕著				玄武岩
15	扁片刃 石斧	7.50×6.00×2.00 平面長方形。約45°の鋭角的な片刃をもつ。全面研磨され、きわめて平滑				花崗閃緑岩

A052

検出地区 F10-6G。台地北東部先端のほぼ平坦部に立地している。

遺構 長軸6.9m×短軸5.7m×深さ0.6m、主軸方位N-40°-W、一部攪乱を受けているものの丸みの強い隅丸長方形の堅穴住居跡と思われる。床はローム面を踏み固めた平坦な床で、硬化面が広範囲に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がってゆく。周溝は全周し、幅は約25cmであった。主柱穴については4本柱でピットの配置から建て替え、或いは、拡張を行っている。炉は床を浅く掘り窪めた地床炉で住居跡中央やや北によっていた。

覆土は、色調を基本に13層に分層された。火災による焼失後、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて、土器を中心に大量に出土している。(1)は、床面直上から覆土下層にかけて出土した壺形土器であるが、底部が穿孔されている珍しい例である。本遺跡において同様の例としてはA050出土の壺形土器が挙げられる。

所見 出土遺物から弥生時代中期、宮ノ台期の堅穴住居跡と考えられる。

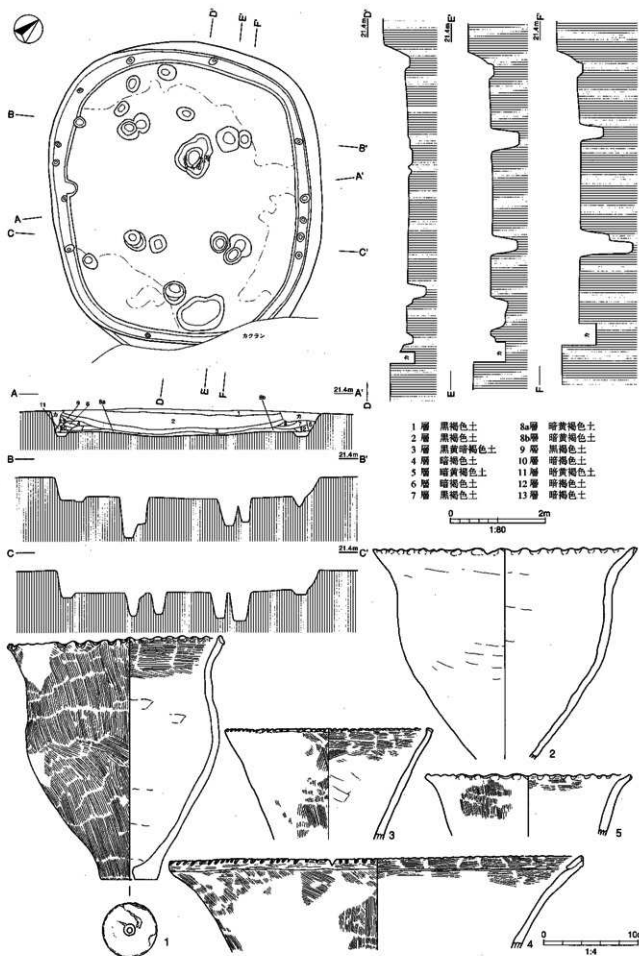


図31 A052

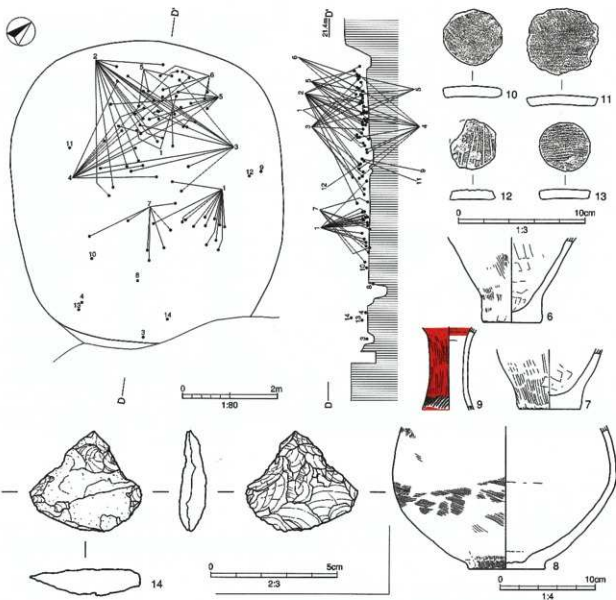


図32 A052 (2)

表6 A052遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	23.0×5.80×25.9 口唇部-押圧 口縁部-ナナメのハケ 頸部-タテのハケ 胴部-ナナメ・タテのハケ	赤褐色 青	青 砂粒多	完形	底部穿孔
2	弥生 甕	(28.0)×-×(22.5) 口唇部-指頭による押圧 ヘラナデ	明褐色 軟	青 砂粒多	2/3	
3	弥生 甕	21.8×-×(11.8) 口唇部-ハケ状工具による刻み目 口縁-胴部-ナナメ・タテのハケ	明赤褐色 青	粗 粗砂粒多	1/4	
4	弥生 甕	(4.40)×-×(9.80) 外面 口唇部-刻み目 折り返し部-ナデ 口縁-ハケ 内面 折り返し部-口縁上位-ハケ 口縁部-ナデ 口縁-外傾 内側に折り返し部	暗褐色 青	青 砂粒多	1/4 以下	口縁部破片
5	弥生 甕	(22.0)×-×(6.60) 口唇部-棒状工具による押圧 口縁部-タテのハケ	明褐色 軟	粗 砂粒多	1/4 以下	

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
6	弥生 壺	-×6.20×(9.10) 胴部-ナナメ・タテのハケ 下端-ヘラケズリ	明褐色 青	青 粗砂粒多	1/4 以下	
7	弥生 壺	-×7.50×(6.30) ヘラケズリ後条痕文	明褐色 青	青 砂粒多	1/4 以下	
8	弥生 壺	-×8.20×(15.2) 残存胴部の上位-ハケ 下半-ハケ後一部ナデ 下端-ハケ一部ヘラケズリ	褐色 軟	青 砂粒多	1/2	
9	弥生 壺	-×-×(8.90) 粗いハケ後ヘラミガキ 下端-L R 単節縄文	暗褐色 青	青 砂粒多	1/4	赤彩
10	土製品 土鉢	4.70×4.40×0.9 ナデ	褐色 青	青 砂粒		
11	土製品 土鉢	5.60×5.20×0.7 条線文	暗褐色 青	青 砂粒多		
12	土製品 土鉢	4.00×3.60×0.8 沈線文	褐色 青	青 砂粒多		
13	土製品 土製 円盤	4.00×3.80×0.75 ハケ	褐色 青	青 砂粒多		土器片利用
14	石器 石匙	3.70×4.20×0.95 平面三角形を呈し、一見石製の形態を示す。やや厚みのある形状をみせる				スクレーパー

A053

検出地区 F10-46G。台地北東部先端のほぼ平坦部に立地している。

遺構 長軸7.05m×短軸6.1m×深さ0.21m、主軸方位N-42°-W、一部攪乱を受けているものの丸みの強い隅丸長方形の竪穴住居跡と思われる。一部溝と重複関係にあるが、本住居跡の方が古い。床はローム面を踏み固めた平坦な床で、硬化面が広範囲に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がってゆく。周溝は一部で検出され、幅は約15cmであった。主柱穴は4本柱であった。炉は床を浅く掘り窪めた地床炉で住居跡中央やや北によっていた。

覆土は、色調を基本に5層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土下層から覆土上層にかけて、土器を中心に出土している。床面直上からの遺物出土量は少なかった。

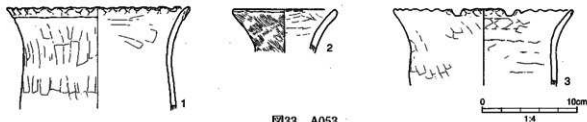


図33 A053

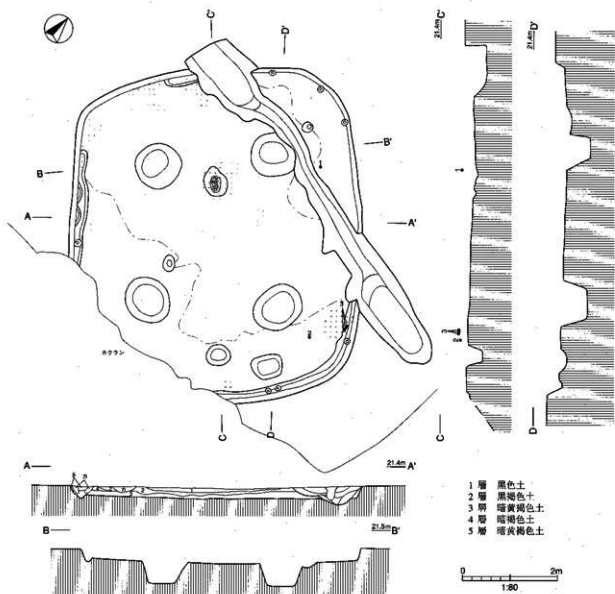


図34 A053 (2)

表7 A053 遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	19.3××(11.0) 折り返し部-ナナ 口唇-押圧 頸部-胴部-ヘラナデ	橙褐 青	普 砂粒多	1/2	
2	弥生 壺	11.2××(4.50) 口唇部-ヨコナデ 口縁部-ナナメのハケ	明橙褐 軟	粗 粗砂粒多	1/4 以下	
3	弥生 甕	(19.1)××(8.10) 口唇部-押圧 口縁-胴部-ヘラナデ	暗褐 青	普 砂粒少	1/4 以下	

A054

検出地区 F10-21G. 台地北東部縁辺のほぼ平坦部に立地している。

遺構 遺構が調査区外に続いているため、規模、形態については不明である。深さ0.2m、推定主軸方位N-27°-W、丸みの強い隅丸長方形、或いは、小判形の竪穴住居跡と思われる。床はローム面を踏み固めた平坦な床で、硬化面が広範囲に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がってゆく。周溝は一部で検出され、幅は約10cmであった。炉は検出されなかった。ピット、周溝の配置から建て替え、或いは、拡張が行われたものと考えられる。

覆土は、色調を基本に6層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて、土器を中心に出土している。

所見 出土遺物から弥生時代中期、宮ノ台期の竪穴住居跡と考えられる。

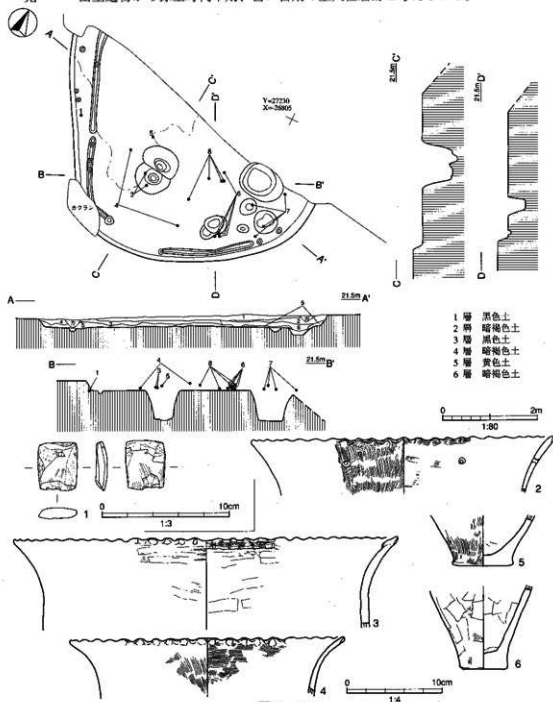


図35 A054

表8 A054 遺物観察表

(単位:cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 扁平片 刃石斧	3.80×3.10×1.00 刃部を中心に前・後面とも良好に研磨されている 刃部は約45度の鋭角な片刃がつく				凝灰岩
2	弥生 甕	(32.4)×-(6.00) 輪襖 外面 口唇部→押圧 口唇上→ハケ 口縁→頸部→ハケ 内面 口唇上端→ハケ以下弱いハケ(ヘラナデとしていいか?) 口縁→焼成後の穿孔1つ有 外反	明褐色	粗 砂粒多	1/4 以下	口縁→頸部遺存 一部スス付着
3	弥生 甕	(40.6)×-(9.70) 輪襖 外面 口唇部→内外からの指痕による押圧 上部→強いヘラナデ→弱いナデ 内面 折り返し部→強いヘラナデ後上端に押圧 口縁→外反 内側に折り返す口縁 下端→刻み目	暗褐色	普 砂粒多	1/4 以下	口縁→頸部遺存
4	弥生 甕	29.0×-(6.30) 口唇部→指痕(内外)による押圧 口縁部→ナメのハケ	暗褐色	粗 粗砂粒多	1/4 以下	
5	弥生 甕	-×6.50×(5.30) タテのハケ	明褐色	粗 砂粒多	1/4 以下	
6	弥生 小型甕	-×5.10×(8.80) タテのハケ後ナデ	明褐色	粗 粗砂粒多	1/4 以下	

(2) 土坑

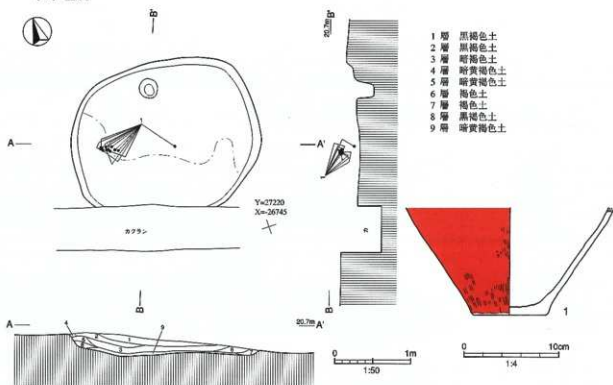


図36 D045

D045

検出地区 F10-15G。台地北東部先端に位置し、ほぼ平坦部に立地している。

遺構 長軸2.51m×短軸4.11m×深さ0.30m、主軸方位N-93°-W、不整形の小堅穴状の土坑である。底部はロームを踏み固めた状態ではほぼ平坦、一部に硬化面が広がる。壁はロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がってゆく。付属施設として小穴を1基検出。一部攪乱されているため、規模、形態等で不明確な部分が多いが、小穴と壁を結ぶラインに直交する長軸を主軸方位とした。周溝、炉は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に9層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土している。(1)は壺形土器の底部から胴部の大型破片で、胎土は粗く、焼成もやや悪い。色調は暗褐色を呈し、赤彩を施す。文様としては無紋でヘラナダの後ヘラミガキによる調整を行っている。

所見 出土遺物から弥生時代中期、宮ノ台期の土坑と考えられる。形態的に小型の堅穴住居跡の可能性もあるが、炉が検出されていないことから、ここでは、用途不明の土坑と判断した。

(3) 方形周溝墓

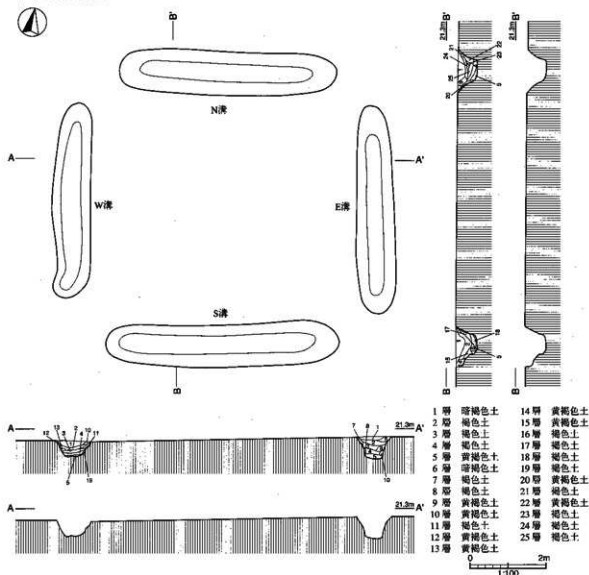


図37 C004

C004

検出地区 G9-29G。台地平坦面に立地している。

遺構 規模7.8m×7.15m、主軸方位N-80°E、四隅に陸橋部を有するタイプの方形周溝墓である。主体部は検出されなかった。周溝の状況は、それぞれ、E溝、長さ5.45m、幅1.0m、深さ0.6m、S溝、長さ6.05m、幅1.0m、深さ0.6m、W溝、長さ5.1m、幅1.0m、深さ0.35m、N溝が、長さ6.0m、幅1.15m、深さ0.5mであった。周溝底部の状況は、いずれもロームの平坦な底部でピット等の付属施設は検出されなかった。壁もロームの壁で、いずれも斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は、色調を基本に25層に分層されたが、何れの周溝も近似した土層であり、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が出土したのみで、遺物の出土量は少なかった。

所見 隣接する方形周溝墓としてC005がある。形態、規模、覆土の状況などから、築造時期の前後はあるにしても、同時期の遺構と考えられる。弥生時代中期、宮ノ台期のものと考えられる。

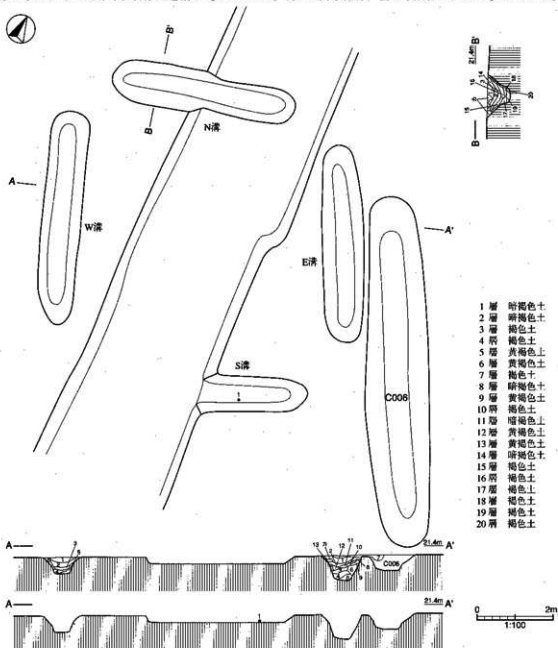




図39 C005(2)

C005

検出地区 G9-35G。台地平坦面に立地している。

遺構 規模7.3m×7.25m、主軸方位N-73°

-E、一部に攪乱を受けているものの、四隅に陸橋

部を有するタイプの方形周溝墓と考えられる。主体部は検出されなかった。周溝の状況は、それぞれ、E溝、長さ5.15m、幅1.05m、深さ0.65m、S溝、長さ不明、幅1.0m、深さ0.4m、W溝、長さ5.6m、幅1.0m、深さ0.4m、N溝が、長さ4.5m、幅1.1m、深さ0.6mであった。周溝底部の状況は、いずれもロームの平坦な底部でピット等の付属施設は検出されなかった。壁もロームの壁で、いずれも斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は、色調を基本に20層に分層されたが、何れの周溝も近似した土層であり、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が出土したのみで、遺物の出土量は少なかった。

(1)は、周溝覆土上層からの出土で、浅鉢形土器の口縁部片である。胎土は明橙褐色を呈し、焼成は良好である。胴部との境に稜線を持ち、調整としては、内面・外面とも丁寧なヘラミガキを施している。縄文時代中期から後期の浅鉢形土器と考えられる。

所見 隣接する方形周溝墓としてC004及びC006がある。形態、規模、覆土の状況などから、築造時期の前後はあるにしても、同時期の遺構と考えられる。特にC004とは規模の点でも近似している。弥生時代中期、宮ノ台期のものと考えられる。

C006

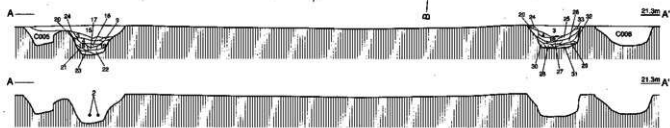
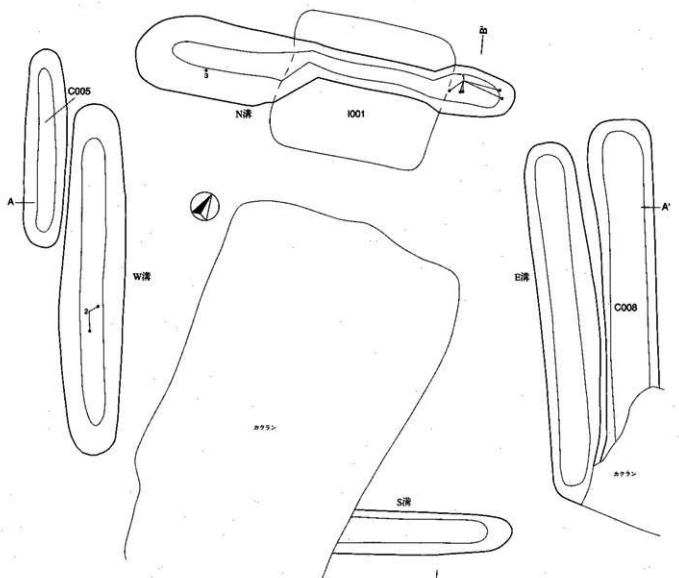
検出地区 G9-44G。台地平坦面に立地している。

遺構 規模12.2m×12.05m、主軸方位N-63°-E、一部に攪乱を受けているものの、四隅に陸橋部を有するタイプの方形周溝墓である。主体部は検出されなかった。周溝の状況は、それぞれ、E溝、長さ9.45m、幅1.50m、深さ0.60m、S溝、長さ不明、幅1.15m、深さ0.45m、W溝、長さ9.2m、幅1.65m、深さ0.70m、N溝が、長さ9.9m、幅2.0m、深さ0.45mであった。周溝底部の状況は、いずれもロームの平坦な底部でピット等の付属施設は検出されなかった。壁もロームの壁で、いずれも斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は、色調を基本に33層に分層されたが、何れの周溝も近似した土層であり、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 全体の遺物の出土量は少なかった。N溝覆土下層からは宮ノ台期の壺形土器(1)及び壺形土器(2)が出土している。

所見 隣接する方形周溝墓としてC005及びC008がある。形態、規模、覆土の状況などから、築造時期の前後はあるにしても、同時期の遺構と考えられる。弥生時代中期、宮ノ台期のものと考えられる。



- | | | | |
|----------|------------|------------|-----------|
| 1 層 黒褐色土 | 10 層 暗黄褐色土 | 19 層 褐色土 | 28 層 褐色土 |
| 2 層 黒褐色土 | 11 層 黒褐色土 | 20 層 暗黄褐色土 | 29 層 褐色土 |
| 3 層 暗褐色土 | 12 層 暗褐色土 | 21 層 褐色土 | 30 層 褐色土 |
| 4 層 暗褐色土 | 13 層 暗黄褐色土 | 22 層 褐色土 | 31 層 褐色土 |
| 5 層 黒色土 | 14 層 黒色土 | 23 層 暗黄褐色土 | 32 層 褐色土 |
| 6 層 暗褐色土 | 15 層 褐色土 | 24 層 褐色土 | 33 層 黒褐色土 |
| 7 層 黒褐色土 | 16 層 褐色土 | 25 層 褐色土 | |
| 8 層 暗褐色土 | 17 層 褐色土 | 26 層 褐色土 | |
| 9 層 褐色土 | 18 層 褐色土 | 27 層 褐色土 | |



図40 C006

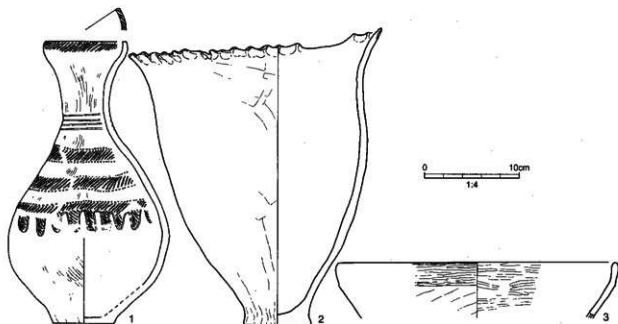


図41 C006(2)

表9 C006遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 □径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	9.40×6.40×29.3 外面 ヘラナダ後ヘラミガキ 内面 ナダ 口縁-L R 単節斜縄文 胴部-沈線4条 胴部-凹形刺突とL R 単節 斜縄文による横帯縄文2段。最下段にL R 羽状縄文を、凹形刺突と沈 線で区画。舌状文を形成	明褐色	粗 粗砂粒多	1/2	
2	弥生 壺	26.8×7.00×31.6 輪横 口唇部-交互押圧 胴部-ヘラナダ後下半ヘラケズリ 内面 ナダ後ヘラミガキ 口縁-外反 底部-平底	明褐色	密 砂粒多	完形	口縁部一部欠損 外面スス付着 内面下半に一部 スス付着
3	弥生 浅鉢?	(30.0)×-(5.90) 輪横 外面 口縁部-ヨコヘラミガキ 胴部-ヘラナダ 内面 口縁部-ヨコヘラミガキ 胴部-ヨコ・ナナメのヘラミガキ	明褐色 硬	粗 砂粒 多	1/4 以下	口縁・胴部との 境に稜をもつ

C007

検出地区 G9-65G。台地平坦面に立地している。

遺構 規模8.1m×8.65m、主軸方位N-64°E、一部に攪乱を受けているものの、四隅に陸橋部を有するタイプの方形周溝墓である。周溝の状況は、それぞれ、E溝、長さ5.9m、幅1.2m、深さ0.6m、S溝、長さ不明、幅0.9m、深さ0.25m、W溝、長さ不明、幅1.05m、深さ0.3m、N溝が、長さ6.0m、幅1.1m、深さ0.55mであった。周溝底部の状況は、いずれもロームの平坦な底部でピット等の付属施設は検出されなかった。壁もロームの壁で、いずれも斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は、色調を基本に33層に分層されたが、何れの周溝も近似した土層であり、自然堆積による埋没が想定される。

台状部ほぼ中央で土坑を検出。形態は、1.86m×1.14m、深さ0.2mの隅丸方形の土坑である。底部はロームのほぼ平坦な床で、壁は斜めに直線的に立ち上がる。覆土は色調を基本に11層に分層した。

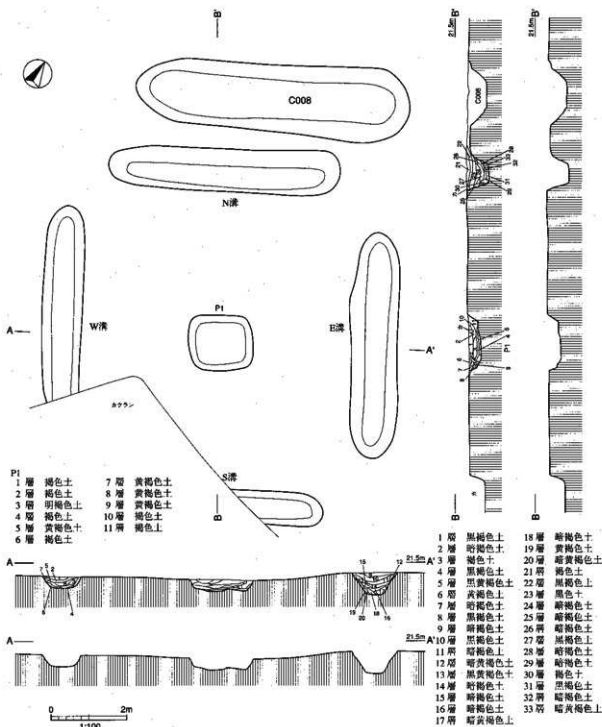


図42 C007

遺物 周溝覆土中に小破片が出土したのみで、遺物の出土量は少なかった。

所見 台状部中央で検出された土坑については、位置・形態・規模等においては主体部として相応しい土坑であるが、出土遺物が無く、また、土層の堆積状況も自然堆積を思わせるセクションであり、土坑の性格を決定するにはなお検討を要する。

隣接する方形周溝墓としてC008がある。形態・規模・覆土の状況などから、築造時期の前後はあるにしても、同時期の遺構と考えられる。弥生時代中期・宮ノ台期のものと考えられる。

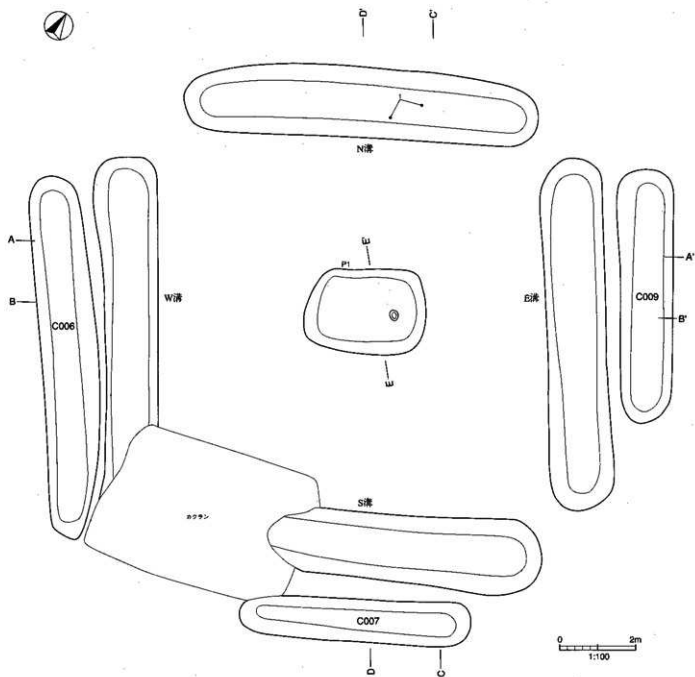


図43 C008

C008

検出地区 G9-54G。台地平坦面に立地している。

遺構 規模11.1m×11.4m、主軸方位N-65°-E、一部に攪乱を受けているものの、四隅に陸橋部を有するタイプの方形周溝墓と考えられる。周溝の状況は、それぞれ、E溝、長さ9.2m、幅1.5m、深さ0.55m、S溝、長さ不明、幅1.2m、深さ0.65m、W溝、長さ不明、幅1.4m、深さ0.55m、N溝が、長さ9.2m、幅1.4m、深さ0.65mであった。周溝底部の状況は、いずれもロームの平坦な底部でビット等の付属施設は検出されなかった。壁もロームの壁で、いずれも斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は、色調を基本に60層に分層されたが、何れの周溝も近似した土層であり、自然堆積による埋没が想定される。

台状部ほぼ中央で土坑を検出。形態は、3.14m×2.2m、深さ0.5mの隅丸長方形の土坑である。底部はロームのほぼ平坦な床であるが、小穴を1基検出している。壁は斜めに直線的に立ち上がる。

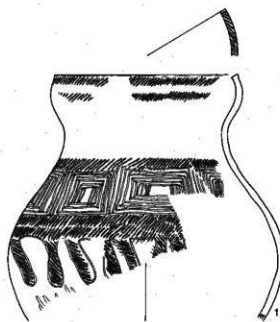
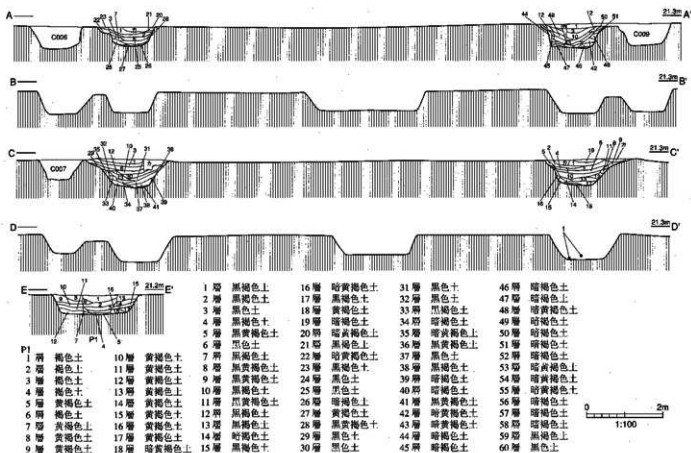


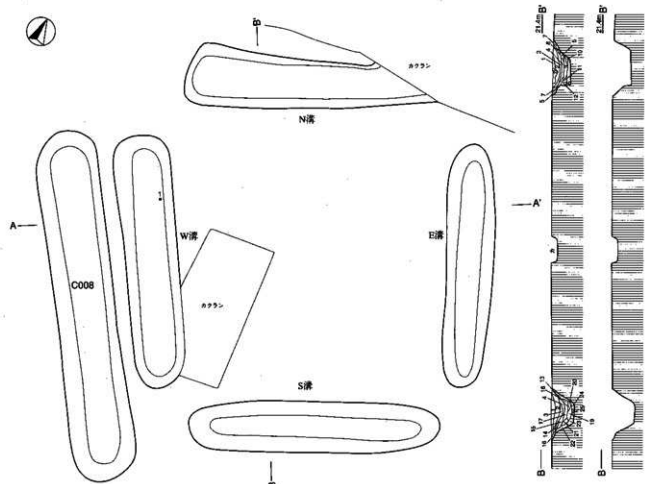
図44 C008(2)

覆土は色調を基本に18層に分層した。人為的な埋め戻しが想定され、主体部の可能性が高い。

遺物 全体的には周溝覆土中に小破片が出土したのみで、遺物の出土量は少なかった。土坑からも遺物は出土しなかった。

(1)は、N溝、底部直上から覆土下層にかけて深鉢形土器が出土している。胎土は緻密で明褐色を呈し焼成も良好である。口縁部、口唇部、頸部下端、胴部上半に単節斜縄文を施す。直下の胴部上半にはハラガキによる重四角文を施す。直下の胴部上半は単節の斜縄文を区画し結紐文を形成している。無文の部分はハラ磨き調整を行っている。宮ノ台期の広口壺形土器と考えられる。

所見 隣接する方形周溝墓としてC005、C009、及びC007がある。形態、規模、覆土の状況などから、築造時期の前後はあるにしても、同時期の遺構と考えられる。弥生時代中期、宮ノ台期のものと考えられる。



1層 暗褐色土	10層 暗黄褐色土	19層 黒褐色土	28層 黒褐色土	37層 黒褐色土
2層 黒色土	11層 暗褐色土	20層 暗褐色土	29層 黄褐色土	38層 黒色土
3層 暗褐色土	12層 暗褐色土	21層 暗褐色土	30層 暗黄褐色土	39層 暗黄褐色土
4層 暗褐色土	13層 暗褐色土	22層 暗黄褐色土	31層 暗褐色土	40層 暗黄褐色土
5層 暗黄褐色土	14層 黒褐色土	23層 黄色土	32層 暗褐色土	41層 暗黄褐色土
6層 黄色土	15層 暗褐色土	24層 暗褐色土	33層 黒褐色土	42層 暗褐色土
7層 暗黄褐色土	16層 暗黄褐色土	25層 暗黄褐色土	34層 暗黄褐色土	
8層 暗褐色土	17層 暗褐色土	26層 暗褐色土	35層 暗褐色土	
9層 暗褐色土	18層 暗褐色土	27層 黒褐色土	36層 暗黄褐色土	



図45 C009

C009

検出地区 G9-54G。台地平坦面に立地している。
 遺構 規模8.3m×9.15m、主軸方位N-68°-E、一部に攪乱を受けているものの、四隅に陸橋部を有するタイプの方形周溝墓と考えられる。主体部は検出されなかった。周溝の状は、それぞれ、E溝、長さ6.45m、幅1.2m、深さ0.45m、S溝、長さ6.5m、幅1.35m、深さ0.6m、W溝、6.65m、幅1.35m、深さ0.55m、

N溝が、長さ不明、幅1.3m、深さ0.45mであった。周溝底部の状況は、いずれもロームの平坦な底部でピット等の付属施設は検出されなかった。壁もロームの壁で、いずれも斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は、色調を基本に40層に分層されたが、何れの周溝も近似した土層であり、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 周溝覆土中に小破片が出土したのみで、遺物の出土量は少なかった。

(1)はW溝覆土上層からの出土。浅鉢形土器の口縁部片である。胴部との境に稜を持ち、調整としては内面・外面ともに丁寧なヘラ磨きを施している。縄文時代中期から後期の浅鉢形土器と考えられる。

所見 隣接する方形周溝墓としてC008がある。形態、規模、覆土の状況などから、築造時期の前後はあるにしても、同時期の遺構と考えられる。弥生時代中期、宮ノ台期のもと考えられる。

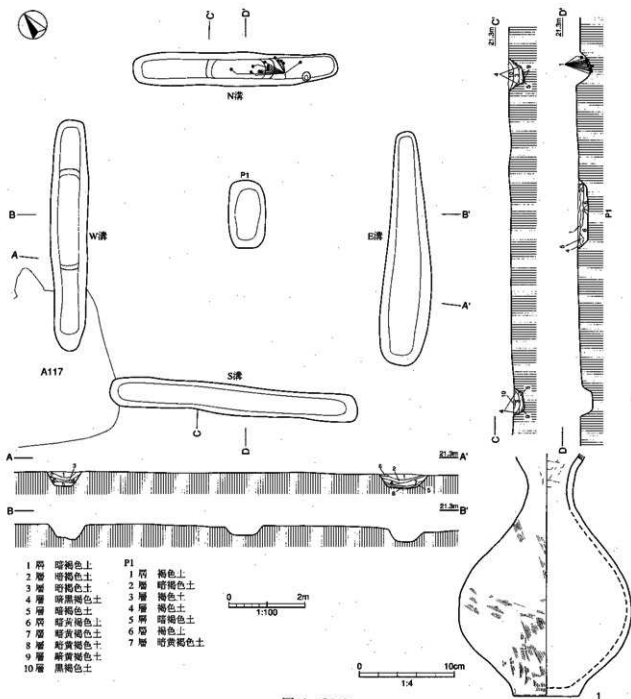


図46 C010

C010

検出地区 F9-100G。台地平坦面に立地し、他の方形周溝墓群とは別に単独で位置する。奈良・平安時代の住居跡A117と重複関係にあり、本遺構の方が古い。

遺構 規模8.75m×8.7m、主軸方位N-38°-Eで、四隅に陸橋部を有するタイプの方形周溝墓である。周溝の状況は、それぞれ、E溝、長さ6.1m、幅1.05m、深さ0.3m、S溝、長さ6.45m、幅0.8m、深さ0.3m、W溝、長さ6.05m、幅0.95m、深さ0.3m、N溝が、長さ5.3m、幅0.9m、深さ0.35mであった。周溝底部の状況は、いずれもローム面を底部としているが、N溝については、中央部分にさらに1段掘り込まれている部分がある。その他の溝については、いずれもロームのほぼ平坦な底部で、ピット等の付属施設は検出されなかった。壁もロームの壁で、いずれも斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は、色調を基本に10層に分層されたが、何れの周溝も近似した土層であり、自然堆積による埋没が想定される。

台状部は中央で土坑を検出。形態は、1.16m×0.94m、深さ0.29mの隅丸長方形の土坑である。底部はロームのほぼ平坦な底部で、壁は斜めに直線的に立ち上がる。覆土は色調を基本に7層に分層した。人為的な埋め戻しが想定され、主体部の可能性が高い。

遺物 N溝底部直上から覆土下層にかけて壺形土器(1)が出土している。全体的には周溝覆土中に小破片が出土したのみで、遺物の出土量は少なかった。土坑からも遺物は出土しなかった。

(1)は、壺型土器で頸部から底部にかけて残存する。焼成は普通で、色調は褐色を呈する。無紋の壺で、胴部中央に最大径をもつ。全体的に刷毛による調整を行っている。

所見 出土遺物、遺構の形態、規模、覆土の状況などから弥生時代中期、宮ノ台期の方形周溝墓と考えられる。

C011

検出地区 G9-3G。台地平坦面に立地している。

遺構 規模9.25m×9.25m、主軸方位N-65°-E、一部に攪乱を受けているものの、四隅に陸橋部を有するタイプの方形周溝墓である。主体部は検出されなかった。周溝の状況は、それぞれ、E溝、長さ6.7m、幅1.3m、深さ0.65m、S溝、長さ6.0m、幅1.25m、深さ0.55m、W溝、長さ不明、幅1.35m、深さ0.7m、N溝が、長さ7.5m、幅1.15m、深さ0.75mであった。周溝底部の状況は、いずれもローム面を底部としているが、N溝については中央部にさらに1段掘り込まれている部分があり、S溝西側にも1段掘り込みがある。その他の溝については、いずれも平坦な底部で、ピット等の付属施設は検出されなかった。壁もロームの壁で、いずれも斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は、色調を基本に10層に分層されたが、何れの周溝も近似した土層であり、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 周溝覆土上層に小破片が出土したのみで、全体の遺物の出土量は少なかった。

所見 隣接する方形周溝墓としてC012及びC014がある。形態、規模、覆土の状況などから、築造時期の前後はあるにしても、同時期の遺構と考えられる。弥生時代中期、宮ノ台期のものと考えられる。

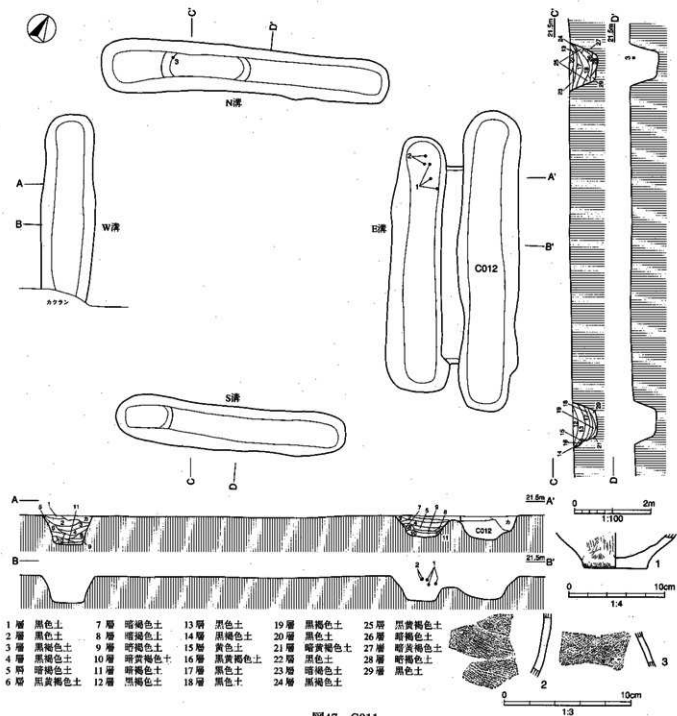


図47 C011

表10 C011遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	一×6.60×(3.70) 輪償 外面 タテのハケ後ヘラミガキ 内面 器面剥離のため不明 底部一平底	褐 軟	粗 砂粒多	1/4 以下 底部片	
2	弥生 甕	外面 ナナメ・ヨコのハケ 内面 器面剥離のため不明	暗褐 普	普 砂粒多		
3	弥生 甕	外面 熟赤文 結節縄文2段 内面 ナア	暗褐褐 普	普 砂粒少		

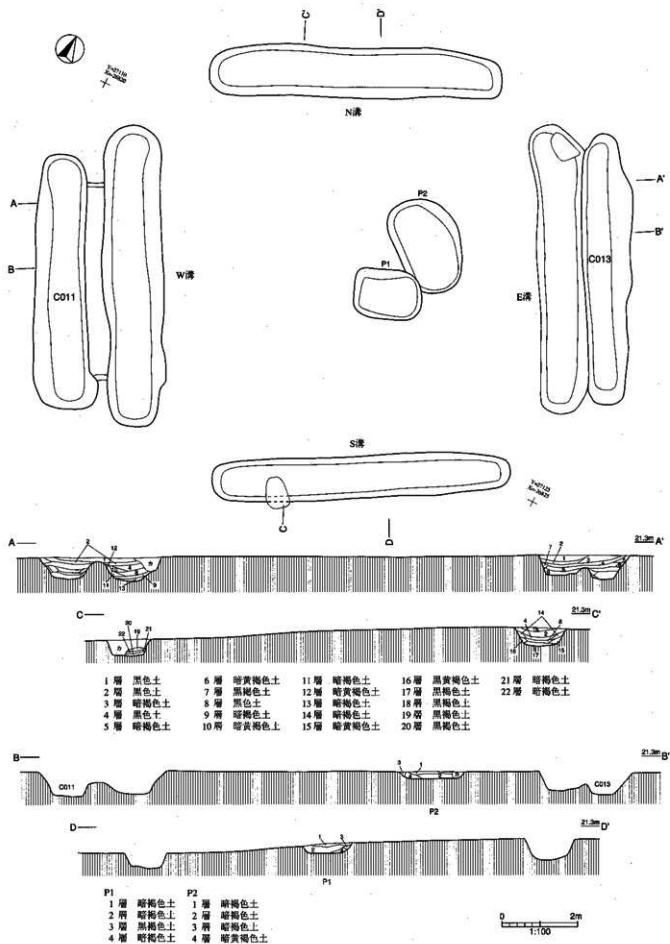


圖48 C012

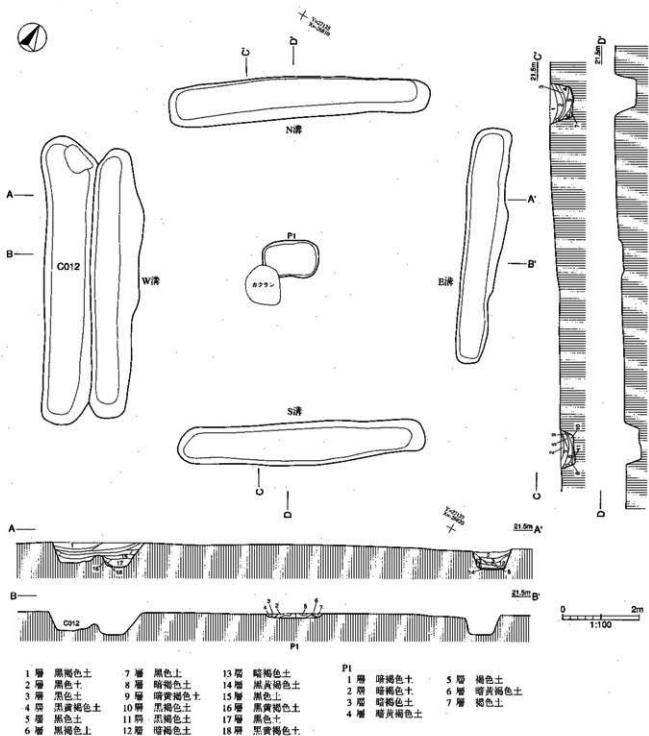


図49 C013

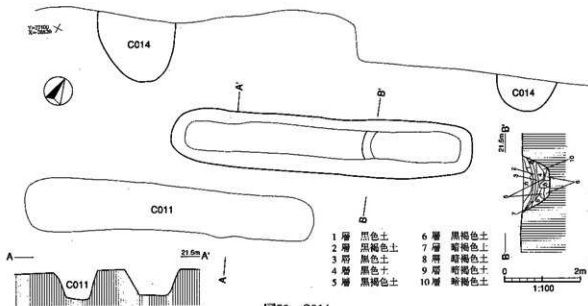


図50 C014

C012

検出地区 G9-13G。台地平坦面に立地している。

遺構 規模11.0m×11.5m、主軸方位N-61°-E、四隅に陸橋部を有するタイプの方形周溝墓である。周溝の状況は、それぞれ、E溝、長さ7.75m、幅1.2m、深さ0.5m、S溝、長さ7.55m、幅1.1m、深さ0.55m、W溝、長さ7.85m、幅1.6m、深さ0.6m、N溝が、長さ7.6m、幅1.3m、深さ0.55mであった。周溝底部の状況は、いずれもロームの平坦な底部で、ピット等の付属施設は検出されなかった。壁もロームの壁で、いずれも斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は、色調を基本に22層に分層されたが、何れの周溝も近似した土層であり、自然堆積による埋没が想定される。

台状部ほぼ中央で土坑を2基検出。P1の形態は、1.76m×1.2m、深さ0.26mの隅丸方形の土坑である。底部はロームのほぼ平坦な底部で、壁は斜めに直線的に立ち上がる。覆土は色調を基本に4層に分層した。人為的な埋め戻しが想定される。遺物は出土しなかった。P2の形態は、2.56m×1.68m、深さ0.19mの不整形の土坑である。底部はロームのほぼ平坦な床で、壁は斜めに直線的に立ち上がる。覆土は色調を基本に4層に分層した。人為的な埋め戻しが想定される。遺物は出土しなかった。P1、P2とも小穴等の付属施設等は検出されなかった。

遺物 周溝覆土中に小破片が出土したのみで、全体の遺物の出土量は少なかった。

所見 隣接する方形周溝墓としてC011及びC013がある。形態、規模、覆土の状況などから、築造時期の前後はあるにしても、同時期の遺構と考えられる。弥生時代中期、官ノ台期のものと考えられる。

C013

検出地区 G9-13G。台地平坦面に立地している。

遺構 規模9.65m×9.05m、主軸方位N-57°-E、四隅に陸橋部を有するタイプの方形周溝墓である。周溝の状況は、それぞれ、E溝、長さ6.2m、幅0.95m、深さ0.45m、S溝、長さ6.4m、幅1.1m、深さ0.4m、W溝、長さ7.05m、幅1.35m、深さ0.6m、N溝が、長さ7.6m、幅1.3m、深さ0.5mであった。周溝底部の状況は、いずれもロームの平坦な底部で、ピット等の付属施設は検出されなかった。壁もロームの壁で、いずれも斜めに直線的に立ち上がってゆく。

覆土は、色調を基本に18層に分層されたが、何れの周溝も近似した土層であり、自然堆積による埋没

が想定される。

台状部はほぼ中央で土坑を検出。形態は、1.44m×0.93m、深さ0.1mの隅丸長方形の土坑である。底部はロームのほぼ平坦な底部で、小穴等の付属施設等は検出されなかった。壁は斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は色調を基本に7層に分層した。人為的な埋め戻しが想定される。遺物は出土しなかった。

遺物 周溝覆土中に小破片が出土したのみで、全体の遺物の出土量は少なかった。

所見 検出された土坑については、形態、規模、覆土の観察から周溝墓の主体部と考えられる。隣接する方形周溝墓としてC012がある。形態、規模、覆土の状況などから、築造時期の前後はあるにしても、同時期の遺構と考えられる。弥生時代中期、宮ノ台期のものと考えられる。

C014

検出地区 G9-13G。台地平坦面に立地している。

遺構 遺構の大部分が保存区域に含まれる為、検出できたのはS溝、E溝とW溝の各一部で、調査を実施したのはS溝のみである。従って主体部の有無も不明である。遺構の検出状況、隣接する方形周溝墓の状況から四隅に陸橋部を有するタイプの方形周溝墓と考えられる。S溝の状況は、長さ7.8m、幅1.45m、深さ0.65mであった。周溝底部はロームのほぼ平坦な底部であるが、周溝東側において更に1段、掘り込まれている部分がある。壁は斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は色調を基本に10層に分層した。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 周溝覆土中に小破片が出土したのみで、全体の遺物の出土量は少なかった。

所見 隣接する方形周溝墓としてC011及びC012がある。形態、規模、覆土の状況などから、築造時期の前後はあるにしても、同時期の遺構と考えられる。弥生時代中期、宮ノ台期のものと判断する。

表11 方形周溝墓一覧

(単位m)

	規模	方位	周溝 E溝	周溝 S溝	周溝 W溝	周溝 N溝
C004	7.8×7.15	N-80°-E	5.45×1.0×0.6	6.05×1.0×0.6	5.1×1.0×0.35	6.0×1.15×0.5
	主体部	無し				
C005	7.3×7.25	N-73°-E	5.15×1.05×0.65	-×1.0×0.4	5.6×1.0×0.4	4.5×1.1×0.6
	主体部	無し				
C006	12.2×12.05	N-63°-E	9.45×1.5×0.6	-×1.15×0.45	9.2×1.65×0.7	9.9×2.0×0.45
	主体部	無し				
C007	8.1×8.65	N-64°-E	5.9×1.2×0.6	-×0.9×0.25	-×1.05×0.3	6.0×1.1×0.55
	主体部	1基有り	P1 1.86×1.14×0.2			
C008	11.1×11.4	N-65°-E	9.2×1.5×0.55	-×1.2×0.65	-×1.4×0.55	9.2×1.4×0.65
	主体部	1基有り	P1 3.14×2.2×0.5			
C009	8.3×9.15	N-68°-E	6.45×1.2×0.45	6.5×1.35×0.6	6.65×1.35×0.55	-×1.3×0.45
	主体部	無し				
C010	8.75×8.7	N-38°-E	6.1×1.05×0.3	6.45×0.8×0.3	6.05×0.95×0.3	5.3×0.9×0.35
	主体部	1基有り	P1 3.16×0.94×0.29			
C011	9.25×9.25	N-65°-E	6.7×1.3×0.65	6.0×1.25×0.55	-×1.35×0.7	7.5×1.15×0.75
	主体部	無し				
C012	11.0×11.5	N-61°-E	7.75×1.2×0.5	7.55×1.1×0.55	7.85×1.6×0.6	7.6×1.3×0.55
	主体部	2基有り	P1 1.76×1.2×0.26		P2 2.56×1.68×0.19	
C013	9.65×9.05	N-57°-E	6.2×0.95×0.45	6.4×1.1×0.4	7.05×1.35×0.6	7.6×1.3×0.5
	主体部	1基有り	P1 1.44×0.93×0.1			
C014	-	-	-×-×-	7.85×1.45×0.65	-×-×-	-×-×-
	主体部	-				

第2項 弥生時代後期



图51 弥生時代後期遺構配置図

(1) 竪穴住居跡

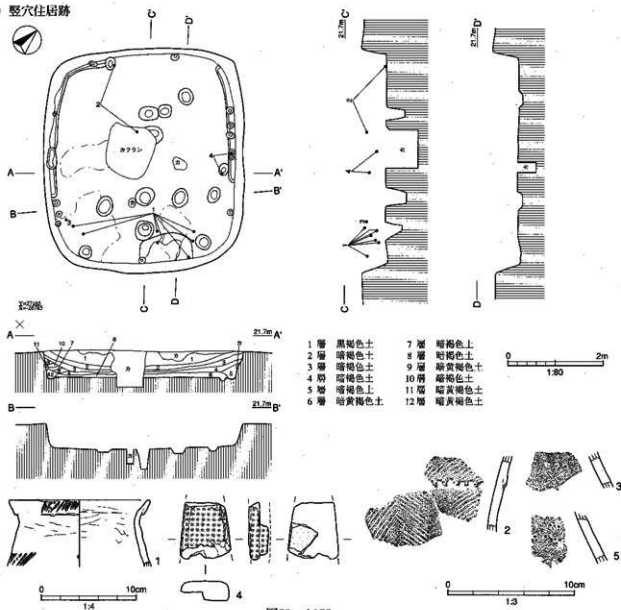


図52 A055

表12 A055遺物観察表

(単位:cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	15.0×-×7.10 口縁部-L R 複節縄文 胴部-ナア 胴部-L R 複節縄文	暗褐色 片	普	1/4	
2	弥生 甕	折り返し部一付加糸縄文 施文後下端に刻み目 胴部一付加糸縄文の羽状縄文施文後タテの磨治区画を作る	暗褐色 軟	普		
3	弥生 甕	斜めの格子目文を挟んで上下に円形刺突列が施文される	暗褐色 軟	普		
4	磁石	6.00×5.30×2.10 全体に剥離が甚だしいが、残存する三面に磨痕が残される				砂岩
5	弥生 甕	斜めの格子目文の間に、2段の円形刺突列をもつ	暗褐色 軟	片		

A055

遺構 床はロームを踏み固めた床で、中央部はやや軟弱である。硬化面が部分的に広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は、色調を基本に12層に分層、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中に少量出土、住居跡南側にやや集中して出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

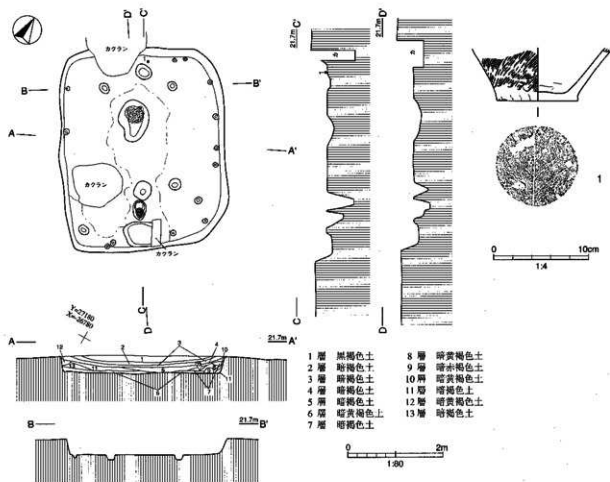


図53 A056

表13 A056遺物観察表

(単位:cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	—×8.60×(5.60) 胴部—付加条縄文 下端—ヘラケズリ	明燈褐色	菅 粗砂粒 炭屑多	1/4	平底 木炭痕

A056

遺構 床はロームを踏み固めた床で、中央部はやや軟弱、硬化面が部分的に広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は、色調を基本に13層に分層、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中に少量出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期、印手系土器を出土する住居跡である。

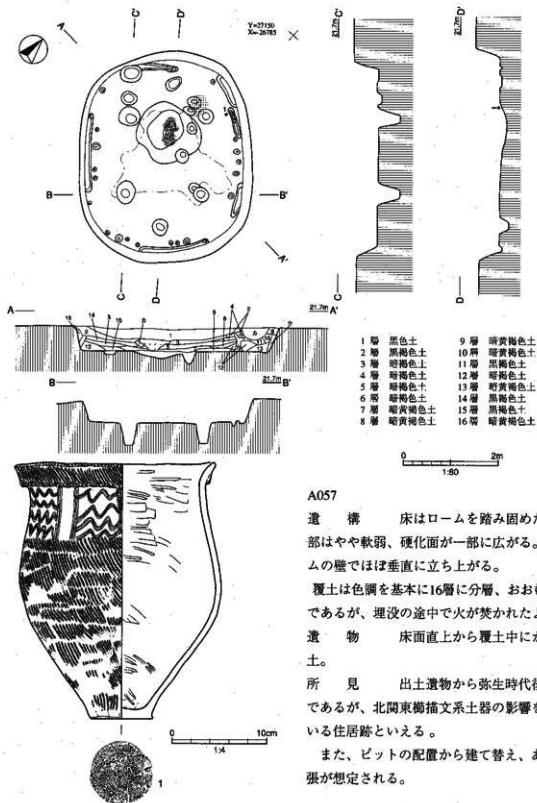


図54 A057

表14 A057遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	21.5×6.70×27.3 輪積 口径上・口径部-異種縄文原体の組み合わせ。 下端ヘラ状工具による刻み目。頸部-櫛揃による波状文とスリット文の 組合せ。胴部-異種縄文原体の組み合わせ(RL単節縄文と付加朱縄文)	橙褐 硬	密 砂粒多	完形	外面・部コガ伏 付着物 折り返し 口縁 木葉痕

A057

遺構 床はロームを踏み固めた床で、中央部はやや軟弱、硬化面が一部に広がる。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に16層に分層、おおむね自然堆積であるが、埋没の途中で火が焚かれたようである。

遺物 床面直上から覆土中にかけて少量出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡であるが、北関東縄文系土器の影響を強く受けている住居跡といえる。

また、ピットの配置から建て替え、あるいは、拡張が想定される。

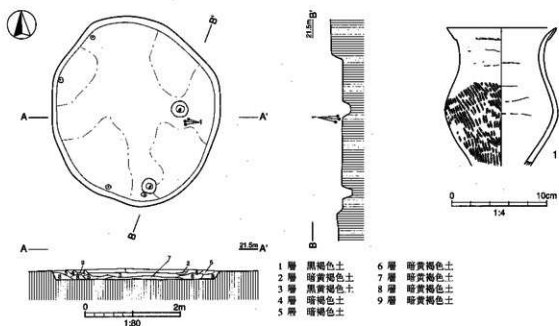


図55 A058

表15 A058遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生壺	(11.5)×-(14.8) 口縁-頸部-ナデ 胴部-付加条縄文 内面 ナデ 外反 折り返し口縁 胴部-やや上半にふくらみをもつ	暗赤褐 普	普 砂粒多	1/4	

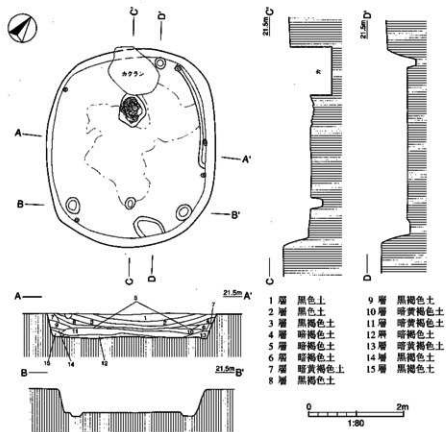


図56 A059

A058

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は部分的にあり、壁はロームの壁で斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に9層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中に少量出土。

所見 炉が検出されていないが、床面・壁・覆土・出土遺物から住居跡と判断、弥生時代後期印手系の住居跡と考えられる。

A059

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は炉を中心にして広範囲に広がる。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に15層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が2点出土したのみであった。

所見 遺構の形態、規模、覆土の状況等から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

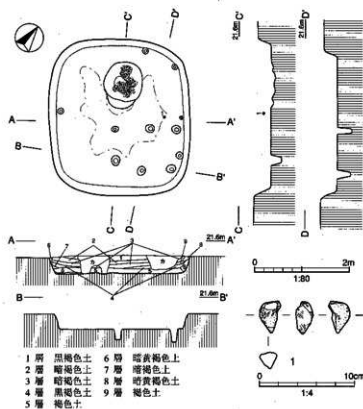


図57 A060

A060

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は、炉を中心にして広範囲に広がる。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に9層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 遺構の形態、規模、覆土の状況等から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

表16 A060遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	軽石 製品	3.40×2.20×1.80 本来は卵状を呈していたと思われるが、半分ほどが残存するのみである。明確な加工痕なども認められない	1.7g				軽石

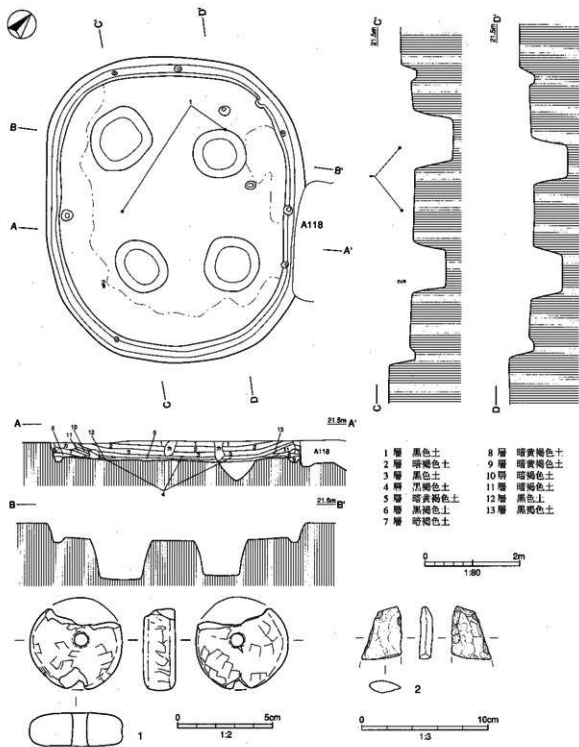


図58 A061

表17 A061遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土 密	遺存	備考
1	土製品 紡錘車	4.90×7.00×1.85(残存部による) ヘラによるケズリ及び指頭によると思われるナデ調整が施される	暗褐色 硬	密 砂粒少	2/3	
2	打製 石斧?	4.20×3.20×1.00 13.8g 一部が残存するのみであり全体の形状を推測するのは難しいが、楔形 打製石斧の基部側の遺存品である可能性も否定できない。磨耗が激しく、調整痕は不明瞭				泥岩

A061

遺構 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部はやや軟弱である。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 灰が検出されていないが、遺構の形態、規模、覆土の状況等から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

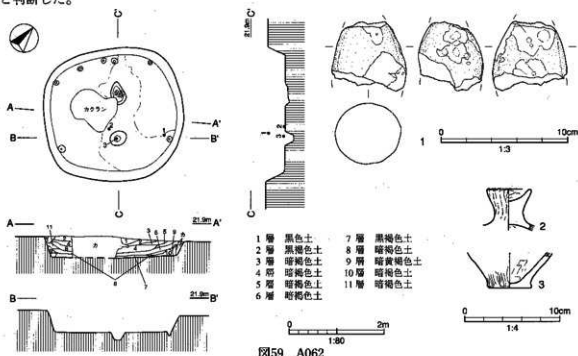


図59 A062

表18 A062遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	磨石	5.50×5.90×5.10 201.0g 全体に剥離が甚だしく、加熱痕もみられるが、残存部に弱い磨痕が残される				安山岩
2	弥生 甕	-×つまみ径4.60×残存4.40 外面 ヘラケズリ 内面 ナダ つまみ上端部はやや薄く仕上げられる。体部との接合部からつまみ部上端に向けて外反しつつ端部で内湾	暗褐 硬	菅 砂粒少 黒斑有		
3	弥生 甕	-×4.70×(3.70) 輪積 外面 ヘラケズリ後タテハラミガキ 内面 ヘラナダ一部ヘラケズリ 平底	暗褐 硬	菅 砂粒少	1/4	

A062

遺構 ロームを踏み固めた床で、壁はロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は色調を基本に11層に分層。暗褐色土系の覆土が主体となる。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。2は弥生土器の甕のつまみの部分で、床面直上から出土している。弥生時代後期、印手系土器の器種構成の中で希に見る器種であり、本住居跡のような小型の住居跡から出土していることは注目される。

所見 出土遺物から弥生時代後期印手系の住居跡と考えられ、本遺跡では小型の住居跡に属す。

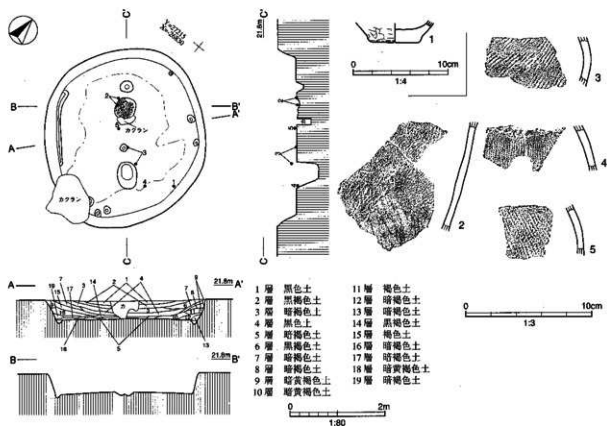


図60 A063

表19 A063遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	一×5.50×(2.20) 輪積 外面 ヘラケズリ 内面 ナデ 平底	褐色 普通	普通 砂粒少	1/4	
2	弥生 甕	外面 付加条縄文 内面 ナデ	暗褐色 普通	普通 砂粒少	胴部片	
3	弥生 甕	外面 無筋縄文 内面 ヘラケズリ後ナデ 輪積	暗褐色 硬	普通 砂粒少	胴部片	
4	弥生 甕	外面 結節縄文一付加条縄文 内面 ナデ 輪積	橙褐色 普通	普通 砂粒少	胴部片	
5	弥生 甕	外面 付加条縄文 内面 ナデ	褐色 普通	普通 粗砂粒多	胴部片	

A063

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は、炉を中心にして広範囲に広がる。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に19層に分層。暗褐色土系の覆土が主体となる。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中にかけて少量出土。

所見 出土遺物等から弥生時代後期の住居跡と考えられる。本遺跡では小型の住居跡に属す。

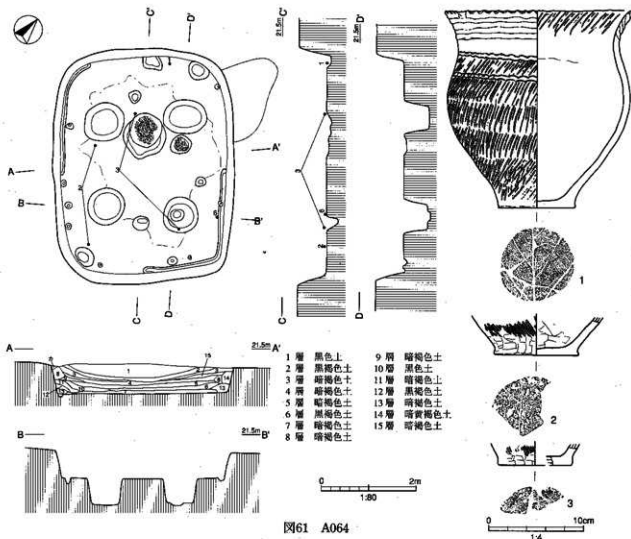


図61 A064

A064

遺 構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は、炉を中心に広範囲に広がる。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に15層に分層。暗褐色土系の覆土が主体となる。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 覆土中から少量出土。

所 見 出土遺物等から弥生時代後期、印手系の住居跡と考えられる。

表20 A064遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎上	遺存	備考
1	弥生 甕	19.7×8.00×21.0 外面 口唇部一棒状工具による押圧 口縁・頸部 一輪積痕 やや外反 胴部一結節2段→付加条縄文→結節2段→付加 条縄文 内面 口縁部一付加条縄文 胴部一ナデ 木葉痕	暗褐 青	片 砂粒多	完形	内外面スス付着 口縁部一部欠損
2	弥生 甕	—×(9.00)×(4.10) 輪積 外面 付加条縄文 下端一ヘラナデ+ヘラケズリ 内面 ヘラナデ 平底 木葉痕	暗褐色 硬	片 砂粒少	1/4 底部片	
3	弥生 甕	—×(8.00)×(2.30) 外面 付加条縄文 下端一ヘラケズリ 内面 ナデ スス付着 木葉痕	暗褐 青	片 粗砂粒 多	1/4 底部片	

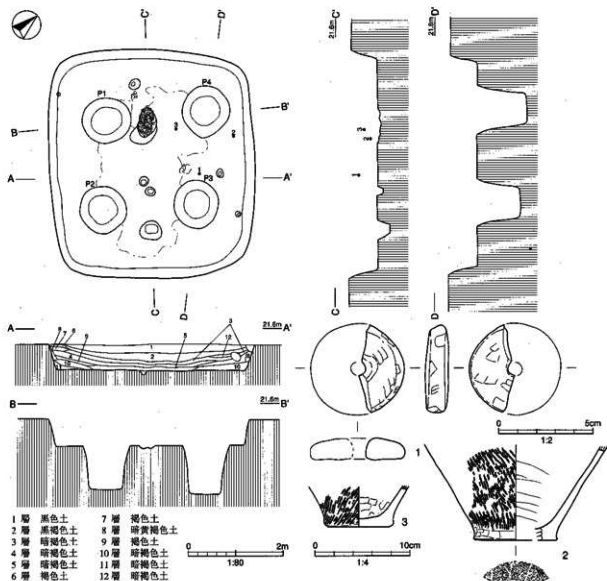


図62 A065

表21 A065遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 紡錘車	(5.00)×(0.80)×1.10 上下舞面ともヘラナデ 下面は平坦 テツクネ	明褐色	善 砂粒少	1/2	内外面スス付着 口縁部・部欠損
2	弥生 甕	—×(9.00)×(10.1) 外面 付加条縄文 下端—ヘラケズリ 内面 強めのヘラナデ 木炭痕	暗褐色	善 粗砂粒多	1/4 胴~ 底部	小石少
3	弥生 甕	—×7.50×(4.40) 輪積 外面 付加条縄文 内面 器面の磨耗が著しいが、ヘラケズリと思われる	暗褐色 善	善 小石多	1/4 底部片	

A065

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は、炉を中心にして広範囲に広がる。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は色調を基本に12層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 出土遺物等から弥生時代後期、印手系の住居跡と考えられる。

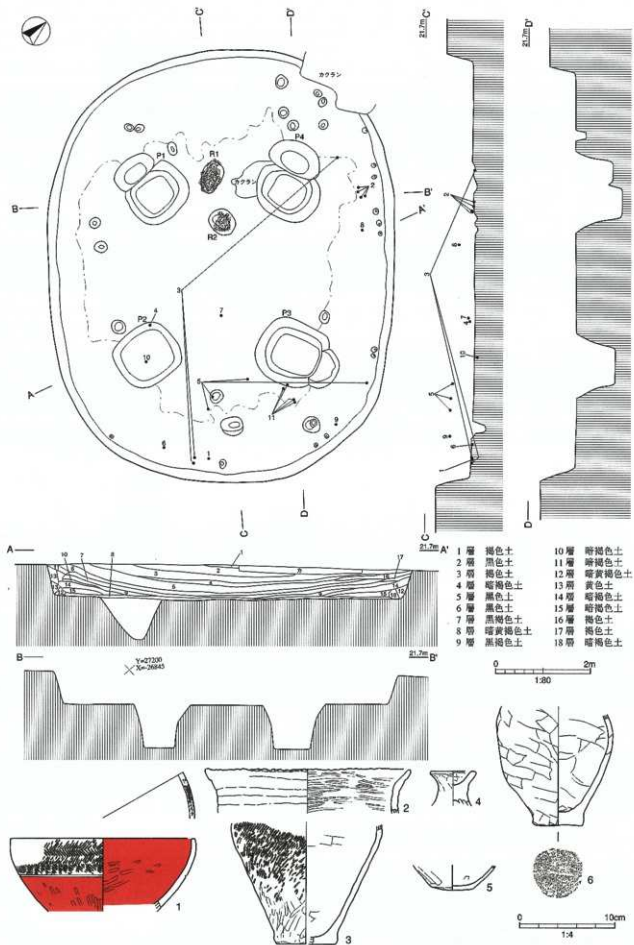


图63 A066

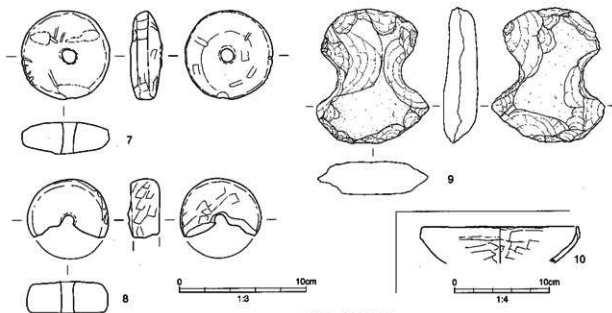


図64 A066(2)

表22 A066遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	(19.8)×-(7.80) 輪積 外面 口唇上-R L単筋縄文 口縁部-羽状縄文→沈線 体部-ナデ 後ヘラミガキ 内面 ナデ後ヘラミガキ 口縁-やや受け口状	橙褐色 青	青 砂粒・ 雲母多	1/4 以下	内・外面赤彩 (体部)
2	弥生 壺	22.0×-(4.80) 外面 口唇部-棒状工具による押圧 口縁部-輪積痕 内面 ヨコヘラミガキ 口縁-外反	褐色 青	青 砂粒少	口縁 部片	
3	弥生 壺	-(6.20)×(12.8) 輪積 外面 付加条縄文 下半-ヘラケズリ 内面 ナデ 平底	褐色 青	青 砂粒少	1/4 以下	胴-底部片
4	弥生 壺	-(つまみ径4.90×(3.50) 輪積 外面 つまみ部上端-上面ヘラケズリ 側面-ナデ 内面 ナデ 口縁 つまみ部上面-ヘラケズリにより平坦面を作出 体部との接合部からつまみ部上端にむけ曲線を描く	明褐色 青	青 砂粒多	1/4	
5	土師器 鉢?	-(4.50×(2.70) 輪積 外面 ヘラケズリ後ナデ 内面 ナデ やや丸底	褐色 青	青 砂粒多 黒斑有	1/4 以下	ミニチュア鉢?
6	弥生 小型壺	-(5.40×(12.7) 輪積痕 外面 ヘラナデ 木葉痕 内面 ヘラナデ 底面近くヘラケズリ 胴部-長脚 底部-平底	暗褐色 青	青 砂粒・ 雲母多	2/3	外面スス付着
7	土製品 紡錘車	4.70×孔径8.00×厚さ1.60 外面 側面は面取り状に調整される。一部線条痕が認められる。 内面 上下面ともナデ一部ミガキが施される 口縁-中心部に厚み	暗褐色 青	青 粗砂粒 少		完形
8	土製品 紡錘車	4.20×孔径6.00×厚さ(1.70) 外面 上下側面ともナデ調整 テズクネ	褐色 硬	青 砂粒少	2/3	
9	打製 石斧	10.5×8.90×厚さ2.70 307.6g 三面に稜面を残す。分銅型打製石斧 調整は全体に粗い				分銅型
10	弥生 高坏	(16.6)×-(3.90) 外面 口唇部-縄文原体の押圧 折り返し部-体部-ナデ 内面 ナデ 口縁-折り返し	褐色 青	青 砂粒少	1/4 以下	口縁部片

遺 構 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部はやや軟弱である。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に18層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 床面直上から覆土中にかけて土器を中心として比較的多く出土した。(1)、(2)はそれぞれ南関東系の高杯の坏部と甕の口縁部一部で床面直上からの出土である。対して(3)は印手系土器の甕の底部から胴部下半であるが、同じく床面直上からの出土であった。また、(4)は、覆土下層からの出土であるが、印手系土器の器種構成としても珍しい蓋形土器の一部が出土した。

所 見 出土遺物等から弥生時代後期の住居跡と考えられる。南関東系の土器と印手系土器が共存する大型住居跡である。地床炉が2基検出されており、検出状況、覆土の観察等からR2からR1へ作り替えたと考えられる。また、住居跡そのものも、ピットの配置から考え、建て替え、あるいは、拡張を行ったものと考えられる。

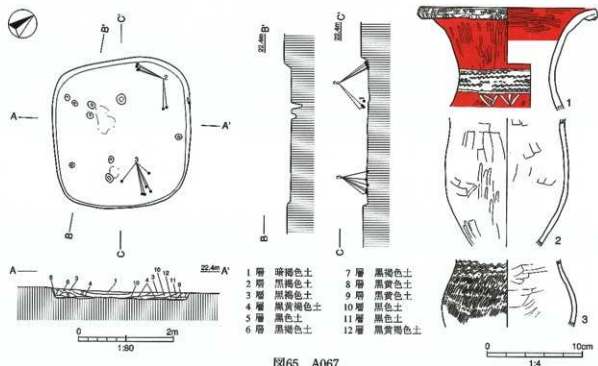


図65 A067

表23 A067遺物観察表

(単位:cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	(19.0)×-(11.0) 複合口縁 外面 複合部-L R単節縄文+R L 単節縄文 下端-押圧 胴部-ナデ後ヘラミガキ→沈線→絞筋5段→ 沈線 胴部-ナデ後ヘラミガキ ヘラ描による難曲状の文様 内面 口縁部-ヘラミガキ 胴部-胴部-ナデ	橙褐 軟	普 砂粒少	1/4 以下	器面の剥離が著 しい 赤影(一部)
2	弥生 甕	-×-(13.6) 輪襷 外面 ヘラケズリ後ナデ 一部ヘラミガキ 内面 ナデ 長刷?	橙褐 普	普 砂粒少	1/4	
3	弥生 甕	-×-(7.10) 外面 胴部-ナデ後絞筋4段 胴部-付加縄文 内面 ヘラナデ 胴上半に影らみをもつ	橙褐 普	普 砂粒少	1/4 以下	

A067

遺構 ロームを踏み固めた床で、一部に硬化面を検出。壁はロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は色調を基本に12層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 全体としての遺物出土量は、少なかったが、床面直上遺物が、比較的多く出土した。

所見 炉は検出されていないが、遺構の形態・規模・覆土堆積状況・遺物出土状況等から、弥生時代後期の住居跡と判断した。A066同様、南関東系の土器と印手系土器が共存する住居跡で、本遺跡においては小型の住居跡に属す。

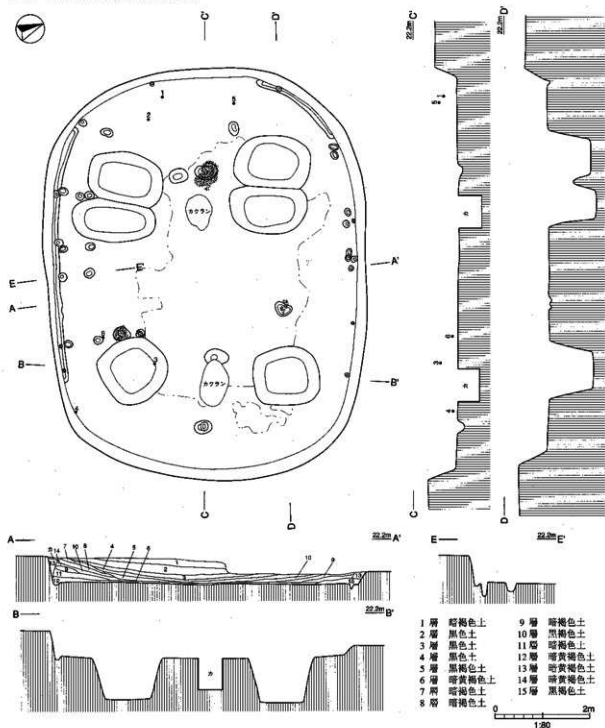


図66 A068

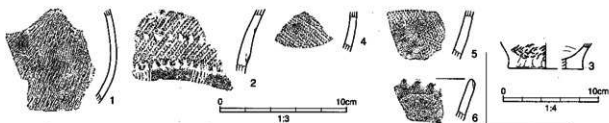


図67 A068(2)

表24 A068遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	輪積 外面 熱永文 内面 ヘラケズリ+ヘラナア	暗褐 硬	普 砂粒	胴部片	外面スス付着
2	弥生 甕	外面 口唇部が欠けている 折り返し部一付加糸縄文を施した後中央部 と下縁に縄文原体の押圧 頸部一縦位帯縄文 内面 ナア 口縁一折り返し 輪積	褐 普	粗 粗砂粒 小石多	口縁～ 頸部	
3	弥生 甕	一×(8.00)×(2.70) 輪積 外面 無節縄文とその未端グループ 内面 ナア	暗褐色 普	普 砂粒多	底部片	
4	弥生 甕	輪積 外面 付加糸縄文 内面 ナア	暗褐 普	普 粗砂粒多	胴部片	一部スス付着
5	弥生 甕	輪積 外面 付加糸縄文 内面 ナア	褐 普	粗 粗砂粒 小石多	胴部片	
6	弥生 甕	輪積 外面 ナア後口唇部縄文原体の押圧 器面剥離多 内面 ヨコのハケ	暗褐 軟	普 砂粒多	口縁 部片	

A068

遺構 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部はやや軟弱である。硬化面は、一部で検出。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に15層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 炉が4基検出されており、柱穴が6本検出されている。壁柱穴に関しても、2重に巡らされている状況が窺える。以上のことから本住居跡は拡張、あるいは、建て替えが行われたと考えられる。出土遺物等から弥生時代後期、印手系の大型住居跡と考えられる。

A069

遺構 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部はやや軟弱である。壁はロームの壁で斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に16層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 土器を中心に覆土上層から床面直上にかけて多量に出土した。

所見 P1、P4は、床面検出時には、それぞれ、2つの柱痕として検出されていた。このことから、本住居跡は、拡張あるいは建て替えが行われたと考えられ、結果、柱穴の掘り形としては、実測図のような形状になったと思われる。古墳時代前期の土師器も比較的多く出土しているが全体の出土状況、遺構の規模、形態から弥生時代後期から古墳時代初期の住居跡と判断した。

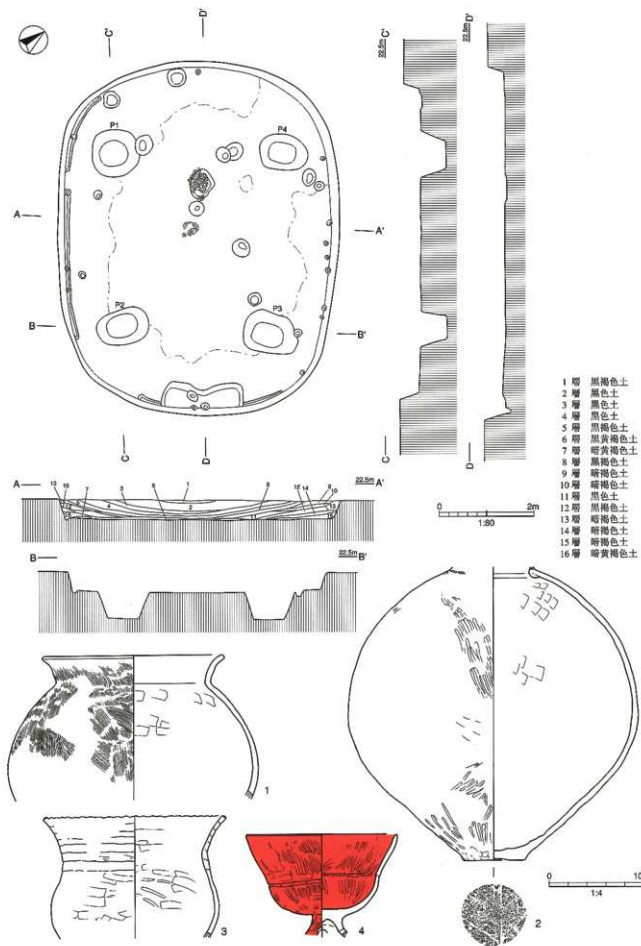


图68 A069

表25 A069遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 □径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	(19.2)×-(15.4) 輪積 外面 □唇~口縁上端~ナデ 口縁~胴部~ナメのハケ 内面 ナデ 口縁~外反 頸部~「く」の字状 胴部~球脚状	褐 香	普 砂粒少	1/4 以下	
2	土師器 大型甕	~×6.70×(31.3) 輪積 底部~木葉痕 外面 頸部に粒状の圧痕 胴部~ナデ後ヘラミガキト端ヘラケズリ 内面 ナデ 器面の調整多 胴部~球脚を呈すると思われる	橙褐 香	普 砂粒多	1/4 以下	
3	弥生 甕	(19.2)×-(12.9) 外面 口縁~頸部~輪積痕 胴部~ヘラナデ 口唇部一部残存 押圧が加えられている 内面 ヘラナデ一部ヘラ ミガキ 口縁~外反 胴部~やや上半が膨らむ	明橙褐 香	普 砂粒少	1/2	
4	土師器 高坏	16.0×-(10.9) 輪積 外面 口縁部~ナデ 体部~ヘラケズリ後 ヘラミガキ 体部中央に沈線 胴部~ヘラミガキ 内面 ナデ後ヘラミガキ 体部~増状をなす 胴部透し孔3ヶ所残存	明赤褐 硬	普 砂粒少	2/3	内外面赤彩か?
5	土師器 台付甕	(19.0)×-(21.0) 輪積 外面 □唇部~ナデ 口縁~頸部~ハケ後ナデ 胴部~ハケ 内面 ナデ 口縁~外反 頸部~「く」の字状 胴部~楕円状	暗褐 香	普 砂粒少	1/4 口縁~ 胴部	
6	土師器 甕	(13.3)×-(22.2) 輪積 外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ 頸部付近一部ヘラケズリ 口縁~直口縁 胴部~球脚状	明橙褐 黒底有 香	粗 粗砂粒多	1/2	
7	土師器 甕	17.8×-(12.7) 外面 □唇~口唇上端~ナデ一部にハケ後ナデ 頸~胴部~ハケ 内面 口縁部~ナデ一部ハケ 口縁~外反 頸部~ 「く」の字状 胴部~球脚状	明橙褐 香	普 砂粒少	1/4	
8	土師器 甕	~×-(5.10) 輪積 外面 ハケ 内面 摺合部~ヘラケズリ 脚部~ナデ 脚部~「ハ」の字状	暗橙褐 香	普 砂粒少	1/4 以下 胴部片	
9	土師器 高坏	(12.0)×-(7.60) 輪積 外面 全体的に磨耗が著しい 残存部 をみるとヘラナデ後ヘラミガキが加えられる 内面 全体的に磨耗が 著しい 口縁と体部の境に沈線 体部~増状を呈する	橙褐 香	普 砂 粒石英 雲母多	1/4 体部片	赤彩一部残存
10	土師器 壺	~×-(5.60) 輪積 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 頸部~ハケ後ヘラミガキ 胴部~ナデ 頸部~強い「く」の字状	褐 硬	普 砂粒多 黒斑有	1/4 以下	頸部~胴部遺存
11	弥生 甕	13.3×-(6.80) 輪積 外面 □唇部~折り返し部~ナデ 下端~ 縄文原体の押圧 頸部~ヘラミガキ 結節3段(現存) 内面 器面割 離著しくはっきりしないが残存部はヘラミガキ 口縁~折り返し	褐 軟	粗 粗砂粒多	口縁部 片	赤彩一部残存
12	土師器 壺	(18.0)×7.80×25.8 輪積 外面 口縁部~ハケ後ヘラミガキ 頸部 ~ハケ 胴上半~ハケ後ヘラミガキ 胴下部~ヘラナデ後一部ヘラミ ガキ 内面口縁部~ハケ後ヘラミガキ 胴部~ナデ	褐 香	普 砂粒多	2/3	
13	土師器 壺	~×(10.0)×(19.0) 外面 胴部~ヘラケズリ後ハケ~ハケ 下端~ヘラケズリ後ヘラナデ 内面 ヘラナデ 胴部~球脚状 胴部下位に段をもつ 底部~平底	明赤褐 香	普 砂粒多	1/4 以下	
14	磨石	4.30×3.00×厚さ5.20 磨石の小破片であるが、割れ面の一部にも磨痕を有しており、再利用 されたと考えられる				

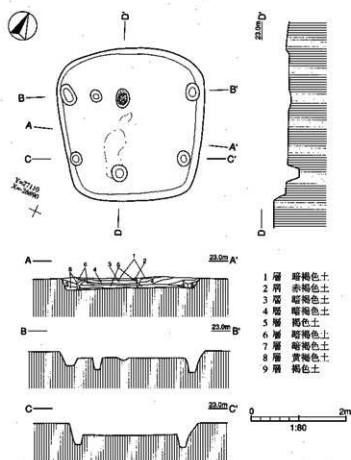


図70 A070

A071

遺構 遺構範囲が調査区外に延びているため、規模については不明だが、形態については、小判形の住居跡と思われる。床はロームを踏み固めた床で、住居跡中央部はやや軟弱である。壁はロームの壁で斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に20層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土したのみ。(1)は弥生時代後期、印手系の土器で蓋形土器の一部で、床面直上からの出土である。(4)も同様に蓋形土器の一部であるが覆土中からの出土であった。(2)、(3)は、共に付加糸縄文を施している壺形土器の胴部片で、ほぼ床面直上からの出土である。

所見 出土遺物から弥生時代後期、印手系の住居跡と判断した。柱穴及び壁柱穴の配列から拡張あるいは建て替えがあった可能性がある。

A070

遺構 ロームの床で、やや軟弱である。掘り込みの浅い住居跡である。壁はロームの壁で斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に9層に分層。覆土上層に焼土を含む層が検出されたものの、暗褐色土系の覆土を主体とする。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土したのみ。

所見 出土遺物・遺構の規模・形態等から弥生時代後期の住居跡と判断した。壁際に柱穴を配置する住居跡で本遺跡では珍しいタイプである。小型の住居跡に属す。

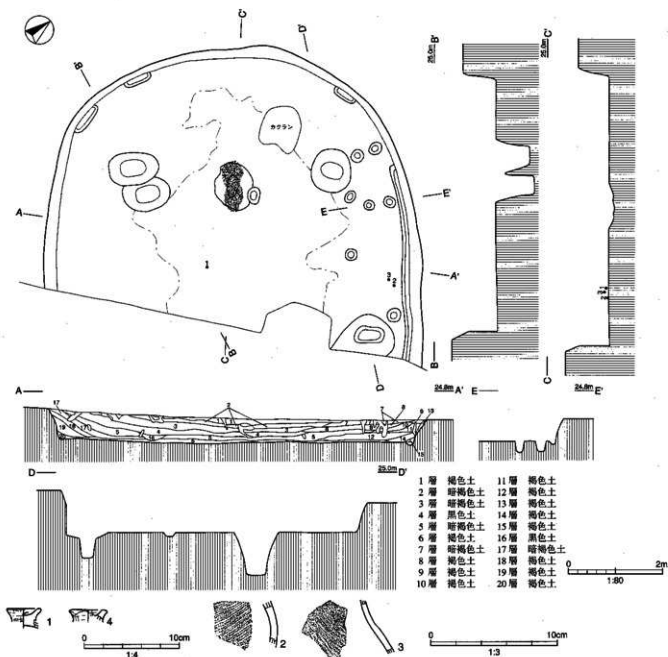


図71 A071

表26 A071遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 蓋	一×つまみ径3.60×(2.10) 輪積 外面 ヘラケズリ後ナデ 内面 ヘラケズリ後ナデ	暗褐色 青	普 砂粒少	1/4 以下 つまみ	
2	弥生 甕	輪積 付加条縄文 外面 ナデ 内面 ナデ	暗褐色 青	普 砂粒多	1/4 以下 胴部片	
3	弥生 甕	輪積 頸部一ナデ 胴部一付加条縄文 外面 ナデ 内面 ナデ	暗褐色 青	普 粗砂粒多	1/4 以下 胴部片	外面スス付着
4	弥生 蓋	一×つまみ径(4.00)×(1.30) ナツクネ 外面 ヘラケズリ後ナデ 内面 ヘラケズリ	暗褐色 軟	粗 砂粒多	1/4 以下	つまみ片遺存

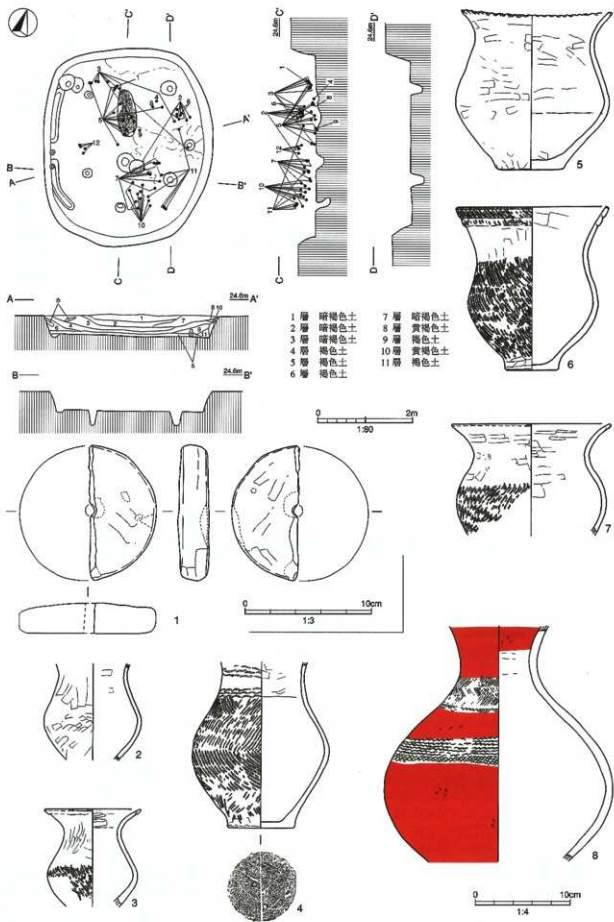


图72 A072

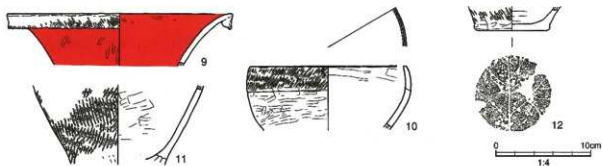


図73 A072(2)

表27 A072遺物観察表

(単位:cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 土製品	径(7.20)×孔径(6.00)×厚さ(1.60) テズクネ 外面 ナテ 内面 ナテ 口縁-比較的大きな作り	暗褐色	普通砂粒 小石多	1/2	紡錘車
2	弥生 小型甕	一×一×(10.2) 輪積 外面 頸部-ナテ 胴部-ヘラケズリ 内面 ナテ 胴部-中央部に膨らみをもつ	暗赤褐色	普通砂粒	2/3	
3	弥生 小型甕	(10.2)×一×(10.4) 輪積 外面 口唇部-付加条縄文 口縁部-ナテ 頸部-胴上半部-ナテ後ヘラミガキ 内面 ナテ後ヘラミガキ 口縁-折り返し 頸部-屈曲 胴部-中央部が膨らむ	褐色 普通	普通砂粒	2/3	
4	弥生 甕	一×7.20×(17.7) 輪積 外面 頸部-結節3段→ナテ-結節3段 胴部-異種の縄文原体の組み合わせ(一部羽状構成) 下端-ヘラケズリ 内面 ナテ	褐色 普通	普通砂粒多	2/3	
5	弥生 甕	15.9×7.00×17.2 輪積 外面 口唇部-棒状工具による押圧 口縁-胴下半部-ナテ 胴下端 -ヘラケズリ 内面 ナテ 底部-平底	褐色 軟	普通砂粒多	2/3	外面スス付着
6	弥生 甕	(16.1)×5.70×17.5 輪積 外面 口唇上~口縁部-付加条縄文 口縁部は2段の輪積痕を有す 頸部-ナテ 胴部-付加条縄文 下端-ヘラケズリ 内面 ナテ	暗赤褐色 普通	普通砂粒少	ほぼ 完形	口縁・胴部の内面に一部スス有 口縁部一部欠損
7	弥生 甕	(17.0)×一×(11.9) 輪積 外面 口唇部-付加条縄文 口縁部-胴上部-ナテ 胴部-付加条縄 文 内面 ナテ 口縁-外反 頸部-屈曲 胴部-中央部が膨らむ	褐色 普通	普通砂粒多	1/4 以下	外面コゲ状付着物 口縁-胴部片遺存
8	弥生 甕	一×一×(25.1) 外面 頸部-羽状縄文の下端をS字状結節文 胴部-S字状結節文6 段の下を網目状捺糸文 内面 頸部-ナテ後ヘラミガキ 胴部-ナテ	明褐色 赤影	普通砂粒多	2/3	器面の剥離・磨耗著しく施文調整の残存は一部
9	弥生 甕	(23.7)×一×(5.60) 輪積 外面 複合部-R L半節縄文 下端- 網目 頸部-ナテ後ヘラミガキ 内面 ナテ後ヘラミガキ 口縁- 複合口縁 内外面とも器面の磨耗・剥離が著しく遺存状態はよくない	明褐色 普通	普通砂粒多	1/4 以下	
10	弥生 無頸甕	(16.5)×一×(6.80) 輪積 外面 口唇上・口縁部-付加条縄文 胴部-ナテ後ヘラミガキ 内面 ナテ後ヘラミガキ 口縁-やや内湾 台付鉢?	明褐色 普通	粗砂粒多	1/4	器面剥離のため 遺存状態不良
11	弥生 甕	一×一×(8.30) 輪積 外面 付加条縄文 下端-一部ヘラケズリ 内面 ヘラナテ	褐色 普通	普通砂粒少	1/4 以下 胴部片	
12	弥生 甕	一×(8.00)×(2.50) 輪積 外面 付加条縄文 下端-ヘラケズリ 内面 ナテ 底部-平底、木葉痕	暗赤褐色 軟	粗粗砂粒多	1/4 以下	胴部- 底部片遺存

A072

遺構 ロームを踏み固めた床で、全体的にしっかりしている。壁はロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に11層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 土器を中心に覆土上層から床面直上にかけて比較的多量に出土した。

所見 小型の住居跡であったが、出土遺物が多く、器種構成に富む。弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系の土器と印手系土器が共伴する住居跡である。

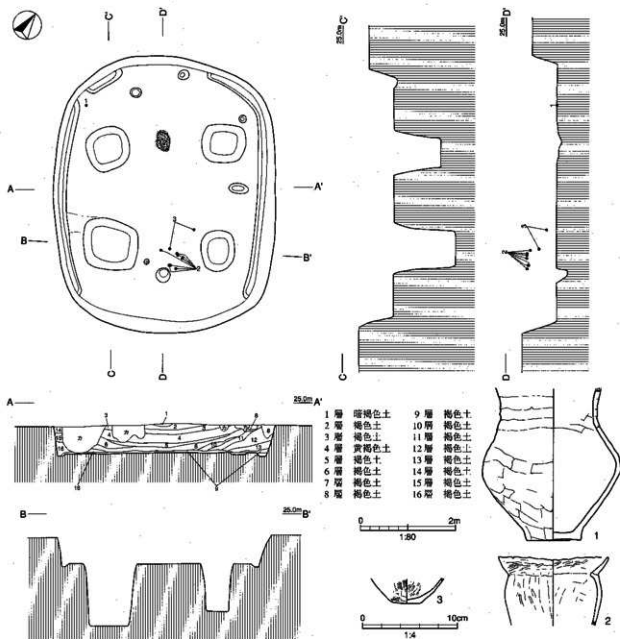


図74 A073

表28 A073遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	—×5.80×16.4 輪積 外面 頸部—輪積痕 胴部—ナダ 下半—ハケ状工具でのナダか？ 内面 ナダ 頸部—輪積痕残存 胴部—中央部そろばん玉状に彫らむ	暗褐色 青	青 砂粒少	ほぼ 完形	口縁部欠損
2	土師器 甕	(11.6)×—×(7.30) 輪積 外面 口縁部—ヘラケズリ 頸—胴部 —ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁部—ヘラケズリ後ヘラミガキ 胴部—ヘラケズリ 口縁—外反 胴部—長胴	暗赤褐色 青	青 粗砂粒少	1/2	
3	土師器 甕	—×3.00×(2.60) 輪積 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ヘラミガキ	暗赤褐色 青	青 粗砂粒多	1/4	ミニチュアの跡か？

A073

遺構 ロームを踏み固めた床で、全体的にしっかりしている。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に16層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。

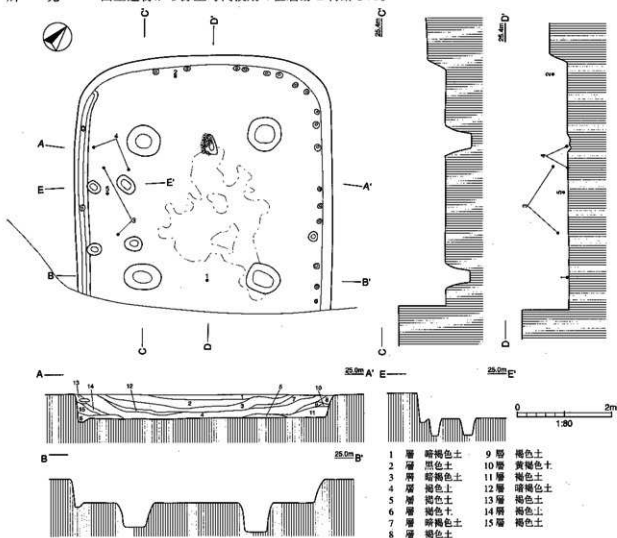


図75 A074

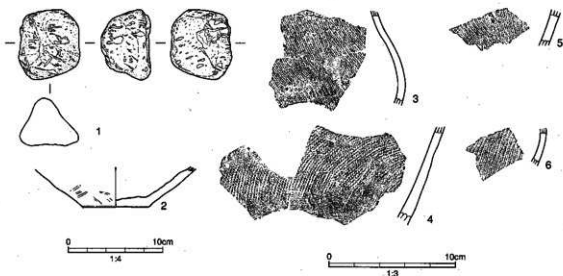


図76 A074(2)

表29 A074遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石製品	7.40×6.50×厚さ5.10 391g 平面一隅丸方形 断面一三角形に近い 中央部が研磨され大きく凹む				大型の軽石製品
2	弥生 壺	一×(7.00)×(4.00) 輪積 外面 ナテ後ヘラミガキ 器面の磨耗が著しい 内面 器面剥離のため不明 底部一平底	明褐色 軟	粗 粗砂粒 雲母多	底部片	
3	弥生 甕	輪積 外面 頸部の下端一部残存-ナテ 胴部-付加条縄文 内面 ナテ	明褐色 普	普 砂粒多	1/4 以下 胴部片	
4	弥生 甕	輪積 外面 付加条縄文 下端-ナテ後-部ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ナテ一部ヘラミガキ	明褐色 普	普 粗砂粒 多	1/4 以下 胴部片	
5	弥生 甕	輪積 外面 付加条縄文 内面 ナテ後ミガキ	褐色 普	普 粗砂粒 多	1/4 以下 胴部片	
6	弥生 甕	外面 付加条縄文 内面 ナテ	暗褐色 普	普 砂粒多	胴部片	

A074

遺構 遺構範囲が調査区外に延びているため、規模については不明だが、形態については、隅丸の住居跡と考えられる。床はロームを踏み固めた床で、全体的にしっかりしている。壁はロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に15層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。床面直上の遺物としては(4)と(5)の付加条縄文を施した甕形土器の胴部片が挙げられる。(6)は覆土中からの出土であった。

所見 出土遺物から弥生時代後期、印手系の住居跡と判断した。

A075

遺構 ロームを踏み固めた床で、壁際に硬化面が広がる。住居跡中央部では、やや軟弱であった。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に17層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 柱穴が2本のタイプの住居跡で本遺跡では、珍しいタイプである。出土遺物等から弥生時代後期の住居跡と判断した。

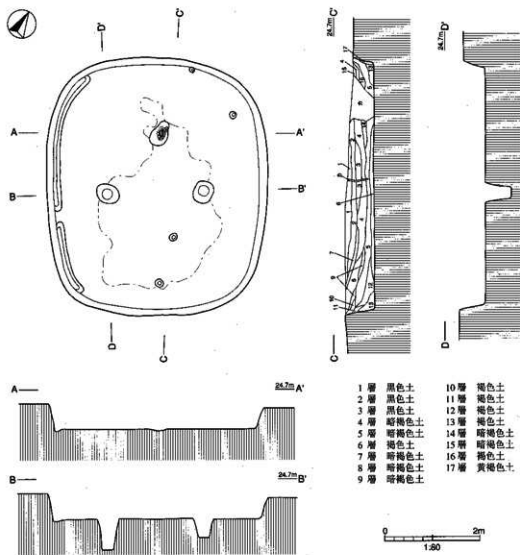


図77 A075

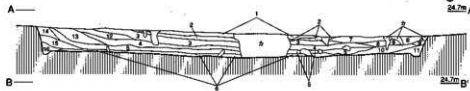
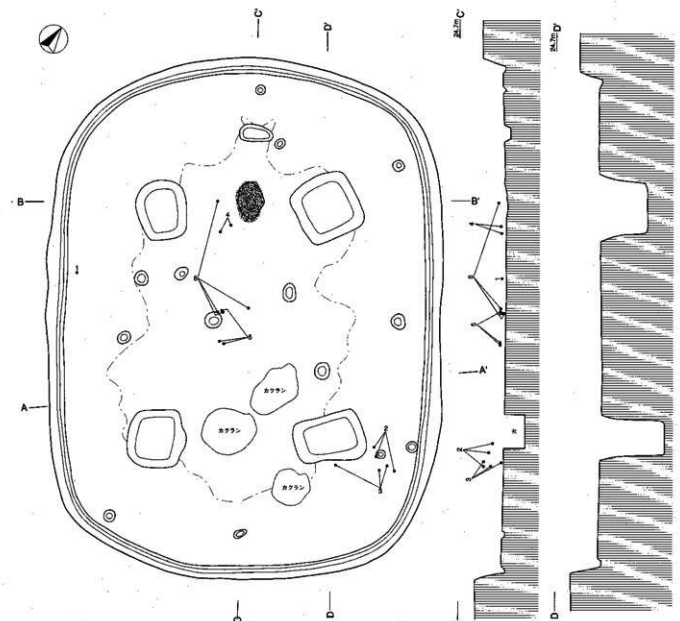
A076

遺構 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部では、やや軟弱であった。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に16層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中にかけて少量出土。

所見 出土遺物・住居跡の規模・形態等から弥生時代後期の住居跡と判断した。本遺跡では、大型の住居跡に属する。



- | | | | |
|-----|------|------|------|
| 1 層 | 暗褐色土 | 9 層 | 褐色土 |
| 2 層 | 暗褐色土 | 10 層 | 褐色土 |
| 3 層 | 暗褐色土 | 11 層 | 暗褐色土 |
| 4 層 | 暗褐色土 | 12 層 | 暗褐色土 |
| 5 層 | 暗褐色土 | 13 層 | 暗褐色土 |
| 6 層 | 褐色土 | 14 層 | 褐色土 |
| 7 層 | 褐色土 | 15 層 | 褐色土 |
| 8 層 | 褐色土 | 16 層 | 褐色土 |

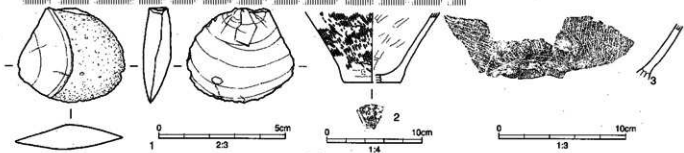
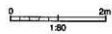


図78 A076



図79 A076(2)

表30 A076遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	割片	3.80×4.30×厚さ1.10 16.6g 幅広い円形割片。片面に磨面を大きく残置する				頁岩
2	弥生 甕	—×(6.00)×— 輪積 外面 付加糸縄文 下端—ヘラケズリ後ナデ 内面 ナデ 底部—平底、木葉痕	橙褐色 普	普 砂粒多 小石微	1/4 以下	胴—底部片遺存
3	弥生 甕	輪積 外面 付加糸縄文 内面 ナデ	橙褐色 普	普 砂粒多	1/4 以下	胴部片
4	土師器 甕	(18.0)×—×(4.50) 輪積 外面 ハケ状工具によるナデ 内面 ハケ状工具によるナデ 一部に 強めに施されたハケの痕跡 口縁—外反 頸部—「く」の字状	暗褐色 普	普 砂粒多	1/4 以下	口縁部片遺存
5	土師器 甕	(20.0)×—×(6.20) 輪積 外面 ハケ状工具によるナデ(一部強め の調整によりハケの痕跡を明確に残す) 内面 ハケ状工具によるナデ 口縁—外反 頸部—「く」の字状	暗赤褐色 普	普 砂粒多	1/4 以下	口縁部片遺存

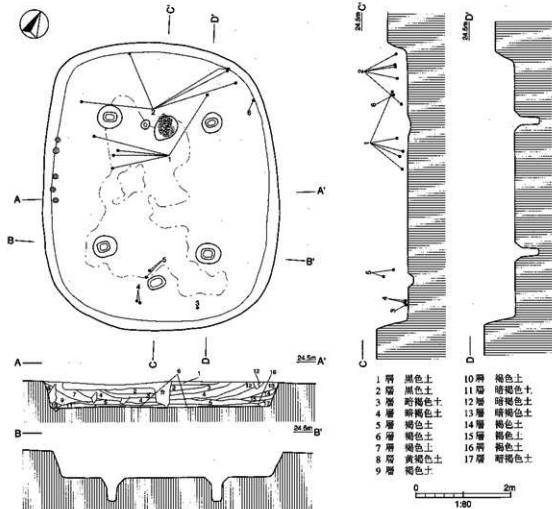


図80 A077

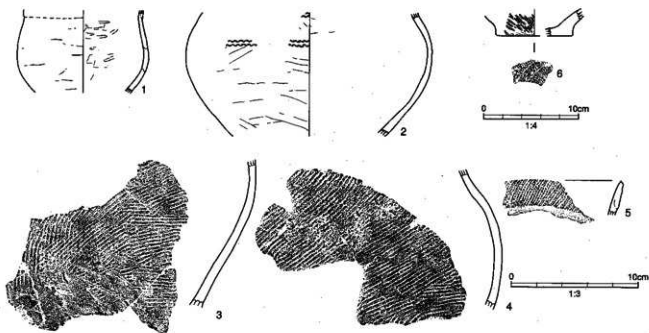


図81 A077(2)

表31 A077遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	一××(8.80) 輪積 外面 頸部-輪積痕 胴部-ヘラナア 内面 ナア後一部ヘラミガキ 頸部-輪積痕を残す	橙褐色 普通	普通 砂粒少	1/4 以下	
2	弥生 壺	一××(13.2) 輪積 外面 全体的にヘラナアを加えた後残存胴 部の上位に結節2段(残存で) 中央よりに結節2段施文 内面 ヘラ ナア 胴部-中央部が膨らむ	暗褐色 普通	普通 砂粒多	1/4 以下	
3	弥生 壺	輪積 外面 付加条縄文 下端-ヘラケズリ 内面 ナア	暗褐色 普通	普通 砂粒多	1/4 以下	外面コゲ状付着 物 内面スス付着
4	弥生 壺	輪積 外面 付加条縄文 内面 ナア	暗褐色 普通	普通 砂粒少	1/4 以下	外面コゲ状付着 物 内面スス付着
5	弥生 壺	輪積 外面 付加条縄文 頸部との境目-強いナア 内面 ナア	暗褐色 普通	普通 砂粒多	1/4 以下	口縁部
6	弥生 壺	外面 付加条縄文 下端-ヘラケズリ 内面 ナア	暗褐色 普通	普通 砂粒少	1/4 以下	平底 木炭痕

A077

遺 構 ロームを踏み固めた床で、全体的にしっかりしている。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に17層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 床面直上から覆土中にかけて少量出土。壁際からの出土が比較的多かった。床面直上の遺物としては(3)と(4)の付加条縄文を施した壺形土器の胴部片が挙げられる。

所 見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。

A078

遺構 ロームを踏み固めた床で、炉の周囲に一部硬化面あり。壁はロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土したのみ。

所見 出土遺物等から弥生時代後期の住居跡と判断した。

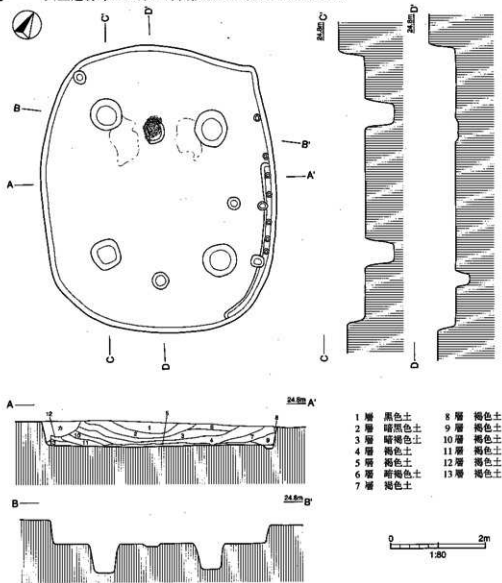


図82 A078

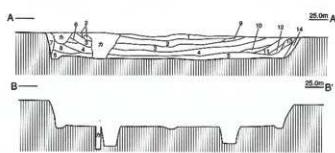
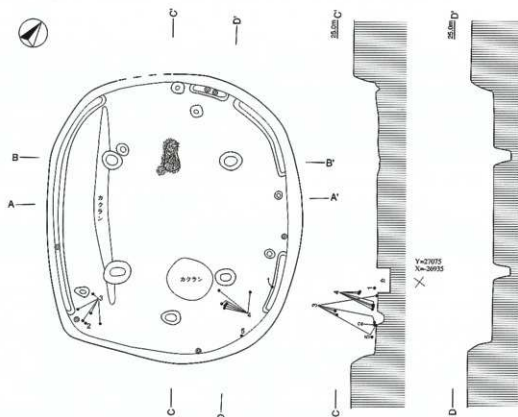
A079

遺構 ロームを踏み固めた床で、全体的にしっかりしている。壁はロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に14層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から床面直上にかけて少量出土した。住居跡南側及び東側コーナーにおいて、出土がやや目立った。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系の土器と印手系土器が共伴する住居跡である。



- | | | | |
|-----|------|------|------|
| 1 層 | 暗褐色土 | 8 層 | 褐色土 |
| 2 層 | 暗褐色土 | 9 層 | 暗褐色土 |
| 3 層 | 暗褐色土 | 10 層 | 褐色土 |
| 4 層 | 褐色土 | 11 層 | 褐色土 |
| 5 層 | 褐色土 | 12 層 | 褐色土 |
| 6 層 | 褐色土 | 13 層 | 黃褐色土 |
| 7 層 | 黃褐色土 | 14 層 | 黃褐色土 |

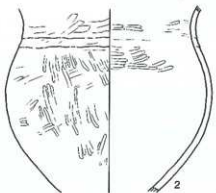
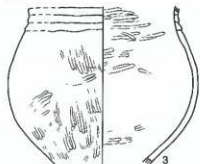
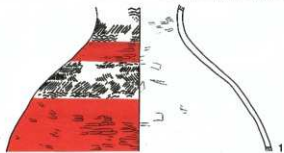
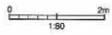


图83 A079

表32 A079遺物観察表

(単位cm)

No	種別 成形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生壺	一×一×(15.6) 輪積 外面 頸部・胴部ともに羽状縄文をS字状結筋文3段で区画 内面 ナデ後ヘラミガキ	明褐色 軟	粗 砂粒少	1/4 以下	赤彩
2	弥生甕	一×一×(20.0) 輪積 外面 頸部-ナデ後輪積痕を残す 胴部-ナデ後ヘラミガキ 内面 ナデ後一部ヘラミガキ 頸部-ゆるやかに屈曲 胴部-球胴状	褐色	粗 粗砂粒少	2/3	外面コゲ状付着物
3	弥生壺	一×一×(16.9) 輪積 外面 頸部-輪積痕 胴部-ナデ後ヘラミガキ 内面 ナデ後一部ヘラミガキ 頸部-輪積痕を残す 胴部-球胴状	褐色	粗 粗砂粒少	2/3	外面コゲ状付着物
4	土師器 高坏	(14.0)×一×(3.00) 輪積 外面 ナデ後ヘラミガキ 内面 ナデ後ヘラミガキ 口縁-浅めの坏部	明褐色 硬	普 砂粒少	1/4 以下 坏部	内面赤彩
5	土師器 高坏	(12.0)×一×(4.60) 輪積 外面 ナデ後ヘラミガキ 内面 ナデ後ヘラミガキ 外面よりいねいな調整がされる	明褐色 硬	普 砂粒少	1/4 以下 坏部	

A080

遺構 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部では、やや軟弱であった。壁はロームの壁では垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に9層に分層。暗褐色土系の覆土を主体とする。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中にかけて土器を中心に比較的多量に出土。壁際に床面直上の遺物がやや目立った。(1)、(2)は、蓋形土器で、覆土上層から下層にかけての出土であった。(10)は、床面直上からの出土で、金属製品が出土したことは注目される。

所見 壁柱穴の配列から拡張が行われたものと考えられる。又、柱材は、柱穴の検出状況及び掘削時の所見から引き抜かれたものと考えられる。主柱穴の規模が他の住居跡と比べ大きい事は、こうした引き抜かれた行為に加え、本来、拡張した為に2本分の柱穴が存在していた可能性がある。出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系の土器と印手系土器が共存する住居跡で、蓋形土器を含め、器種構成に富む。本遺跡では大型の住居跡に属する。

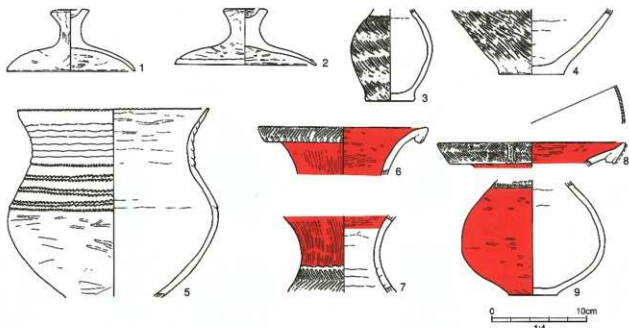


図84 A080

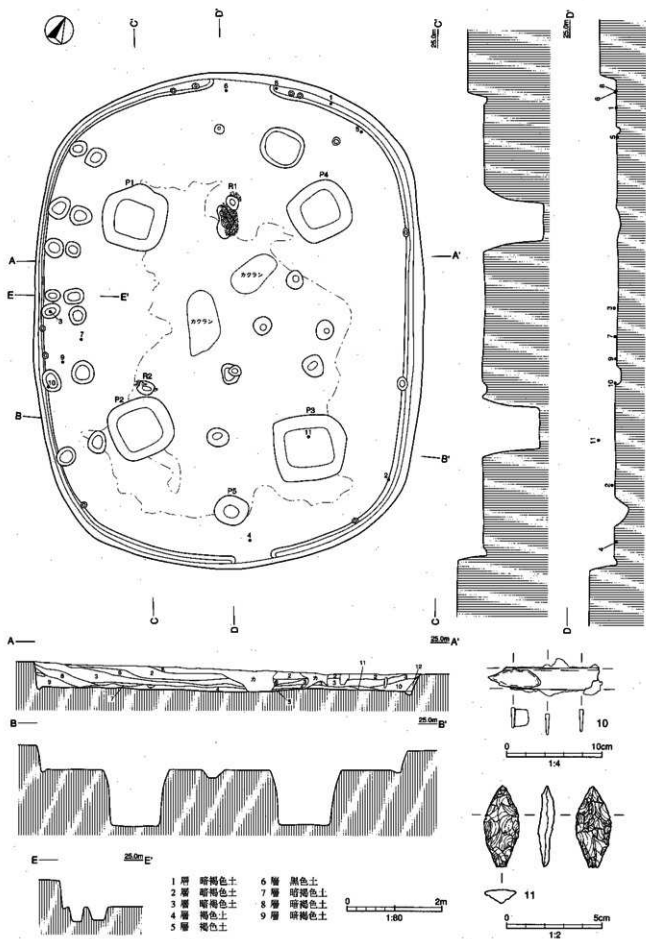


図85 A080(2)

表33 A080遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	口径13.6×つまみ径4.10 輪積 外面 つまみ部→ヘラケズリ後ヘラミガキ 体部→ヘラナダ後ヘラミガキ(残存一部) 内面 つまみ部上面→ヘラケズリ 体部→ヘラナダ後ヘラミガキ	暗褐色 青	普 砂粒少	2/3	
2	弥生 甕	口径15.0×つまみ径4.60 輪積 蓋部→折り返し 外面 つまみ部→ナダ 体部→ナダ後不定方向のヘラミガキ 内面 つまみ上体→ヘラケズリ後ヘラミガキ 体部→ヘラナダ後ヘラミガキ	暗褐色 青	普 砂粒少	2/3	
3	弥生 小型甕	×5.20×(9.80) 輪積 外面 胴部→撓指波状文 胴部→付加糸縄文 下端→ヘラケズリ 内面 ナダ 胴部→長胴 底部→平底	暗褐色 青	普 粗砂粒多	2/3 胴部→ 底部	
4	弥生 甕	×7.00×(6.90) 輪積 外面 付加糸縄文 下端→ヘラナダ 内面 ナダ 底部→平底	明褐色 青	普 砂粒多	1/4 胴部→ 底部	
5	弥生 甕	20.0×××(20.1) 輪積 外面 口唇部→刻み目 口縁部→輪積痕を残す。胴部と胴部の境の輪積痕 下端に凹形刺突を加える 胴上半→結節縄文2本1組を3段 中央部の輪積痕下端に凹形刺突 下半→ヘラナダ後一部ヘラミガキ 内面 口縁→頸部→ヘラナダ後一部ヘラミガキ 胴部→ヘラナダ	暗褐色 青	普 砂粒少	2/3	口縁→頸部→輪積痕を残す 胴部→中央部が 膨らみ下半すぼ まる
6	弥生 甕	(18.0)×××(15.0) 輪積 外面 複合部→L R 単節縄文施文後下端刻み目 胴部→ナダ後ヘラミガキ 内面 ナダ後ヘラミガキ 複合口縁	明褐色 軟	普 砂粒多	1/4 口縁部 破片	赤彩
7	弥生 甕	×××(8.00) 輪積 外面 ヘラミガキ→結節縄文1段→羽状縄文 内面 ヘラミガキ→ナダ(一部に輪積痕有) 頸部→ゆるい「く」の字状	暗褐色 青	普 砂粒多	1/4 頸部	赤彩
8	弥生 甕	(20.0)×××(26.0) 輪積 外面 口唇→L R 単節縄文 複合部→羽状縄文(L R + R L) 棒状浮文の痕跡2ヶ所(2本1組) 内面 ナダ後ヘラミガキ 複合口縁→棒状浮文(2本1組)の痕跡2ヶ所	明褐色 硬	普 砂粒多	1/4 口縁部	赤彩
9	弥生 甕	×5.00×(12.2) 外面 羽状の刻み目→沈蝕→ナダ後ヘラミガキ 内面 ナダ 胴部→やや下半に最大径をもつ 底部→平底	明褐色 青	普 砂粒多	2/3	黒斑有 赤彩
10	鉄器 不明	11.7×2.10×1.80 2.20×0.40 61.2g 2.30×0.40				
11	尖頭器	4.30×1.80×厚さ2.90 5.3g 小型の木葉形の尖頭器。両面にていねいな調整が加えられている				母石 珪質頁岩

A081

遺 構 ロームを踏み固めた床で、住居跡南側に硬化面が広がる。壁はロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に25層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 床面直上から覆土中にかけて土器を中心に多量出土。(18)、(19)、(20)は蓋形土器で覆土中層から下層にかけての出土であった。その他、軽石の出土が目立つ。

所 見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系の土器と印手系土器が共存する住居跡である。本遺跡では、大型の住居跡に属する。

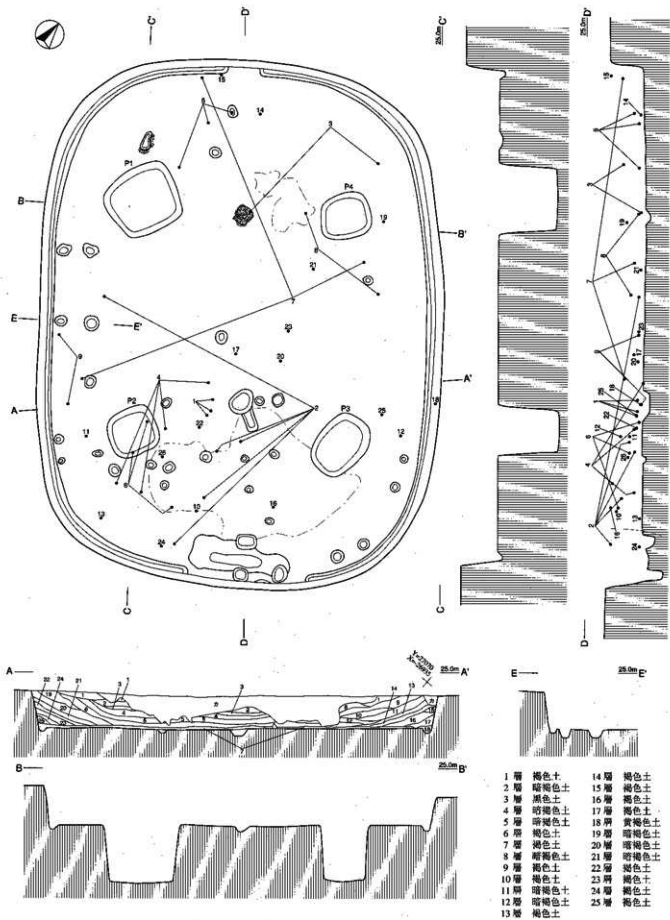


图86 A081

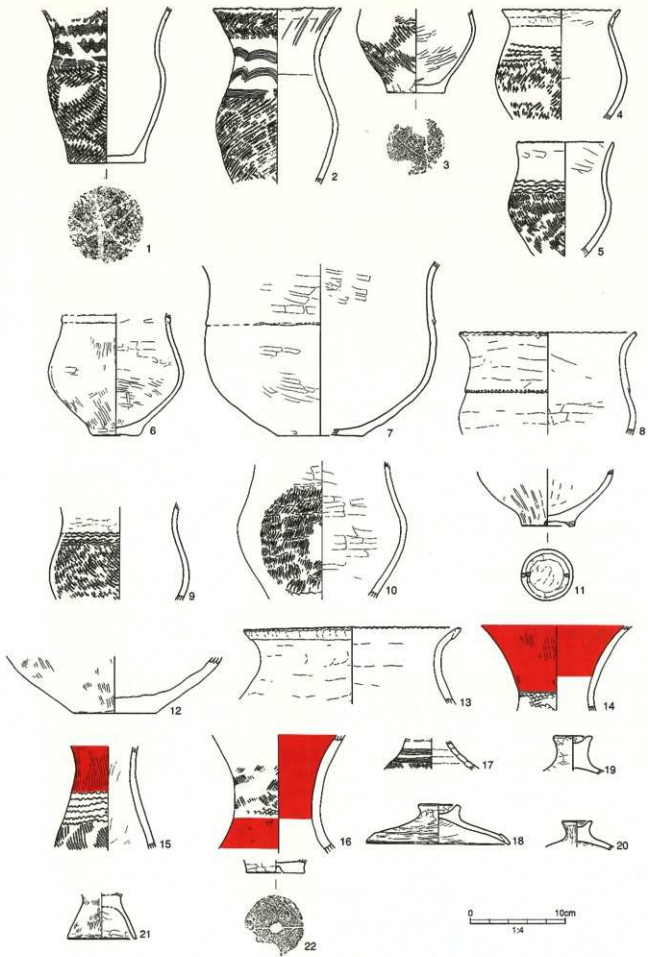


图87 A081(2)

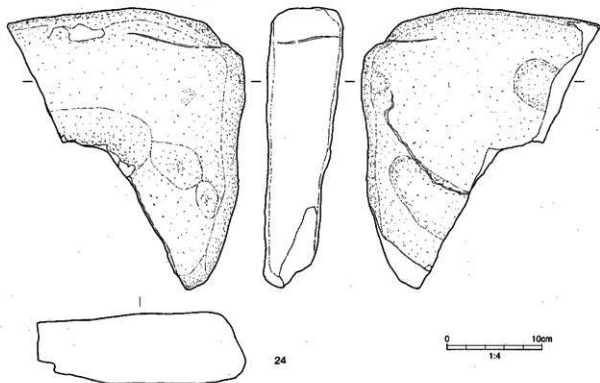
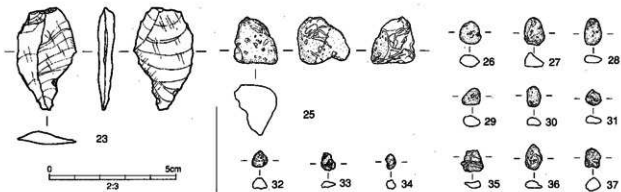


図88 A081(3)

表34 A081遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	—×8.00×(16.6) 輪積 外面 口縁下部→付加条縄文→棒状工具による刺突 頸部→櫛形横走波状文→櫛形横走文 胴部→付加条縄文による羽状構成 内面 ナデ 器面の剥離著しい	口径下部→付加条縄文→棒状工具	褐色	粗粗砂粒	2/3	底部→木炭痕
2	弥生 壺	13.4×—×(18.7) 輪積 外面 口唇→縄文原体の押圧 口縁部→付加条縄文の羽状構成 羽状中央部と末端に棒状工具による刺突 頸部→7本歯による櫛形連風文2段→櫛形横走文 胴部 付加条縄文	口唇部→縄文原体の押圧 口縁部→付加条縄文の羽状構成 羽状中央部と末端に棒状工具による刺突 頸部→7本歯による櫛形連風文2段→櫛形横走文 胴部 付加条縄文	明褐色	普通粗砂粒	2/3	
3	弥生 壺	—×6.20×(8.90) 輪積 外面 頸部(残存ごく一部)→ナデ 胴部→結節4段→付加条縄文 内面 一部ヘラミガキ 底部→木炭痕	胴部→結節4段→付加条縄文	暗褐色	普通砂粒	1/4	
4	弥生 壺	(12.5)×—×(11.9) 外面 口唇部→押圧 口縁部→輪積痕2段 頸部→ナデ 胴部→結節4段→付加条縄文(2種の異なる原体を用いる) 内面 ナデ後一部ヘラミガキ 器面の剥離多 口縁→外反	口唇部→押圧 口縁部→輪積痕2段 胴部→結節4段→付加条縄文(2種の異なる原体を用いる)	暗褐色	粗粗砂粒少	2/3	底部欠損
5	弥生 壺	(10.5)×—×(12.4) 輪積 胴部→中央やや上に影らみをもつ 外面 口縁→頸部→ナデ 胴部→結節4段→R.L.單節縄文 内面 ナデ 口縁→直口縁 頸部→ごくゆるやかにくびれる	胴部→中央やや上に影らみをもつ 胴部→結節4段→R.L.單節縄文	暗褐色	普通砂粒多	2/3	口縁→胴部